# 平成28年度大学教育再生戦略推進費
# 「大学の世界展開力強化事業」 計画調書
## ～ アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化 ～

［基本情報］

| | | |
|---|---|---|
| 1. 大学名（○が代表申請大学） | 千葉大学 | |
| 2. 機関番号 | 代表申請大学 | 12501 |
| 3. タイプ | A－② | キャンパス・アジア（CA）事業の推進<br>＜新たにCAに取り組むもの＞ |
| 4. 事業者（大学の設置者） | （氏名）ふりがな：とくひさ たけし<br>徳　久　剛　史 | （所属・職名）学長 |
| 5. 申請者（大学の学長） | （氏名）ふりがな：とくひさ たけし<br>徳　久　剛　史 | |
| 6. 事業責任者 | （氏名）ふりがな：わたなべ まこと<br>渡　邉　誠 | （所属・職名）理事（教育・国際担当） |
| 7. 事業名 | 【和文】※40文字程度<br>植物環境イノベーション・プログラム | |
| | 【英文】<br>Plant & Environment Innovation Program | |
| 8. 取組学部・研究科等名（必要に応じ[ ]書きで課程区分を記入。複数の部局で合わせて取組を形成する場合は、全ての部局名を記入。大学全体の場合は全学と記入の上[ ]書きで全ての部局名を記入。） | 学問分野 | ○ 人社系 ○ 理工系 ○ 農学系 ○ 医歯薬系 ○ 看護・医療系 ◉ 全学 ○ その他 |
| | 実施対象（学部・大学院） | ○ 学部 ○ 大学院 ◉ 学部及び大学 |
| | 全学[ 園芸学研究科・園芸学部、工学研究科・工学部、国際教養学部、環境健康フィールド科学センター ] | |

### 9. 海外の相手大学

| | 国名 | 大学名 | 部局名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 中国 | 清華大学 | 建築学院、美術学院 |
| 2 | 中国 | 浙江大学 | 国際デザイン研究院 |
| 3 | 韓国 | 延世大学 | 人文芸術大学デザイン芸術学部 |
| 4 | | | |
| 5 | | | |
| 6 | | | |
| 7 | | | |
| 8 | | | |
| 9 | | | |
| 10 | | | |

### 10. 連携して事業を行う機関（国内連携大学）

| | 大学名 | 取組学部・研究科等名 | | 大学名 | 取組学部・研究科等名 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | | 4 | | |
| 2 | | | 5 | | |
| 3 | | | 6 | | |

| 11.「学校教育法施行規則」第172条の2第1項において「公表するものとする」とされた教育研究活動等の状況について、公表しているHPのURL |
|---|
| http://www.chiba-u.ac.jp/general/disclosure/teaching/index.html |

| 12. 本事業経費（単位：千円） ※千円未満は切り捨て | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年度（平成） | | 28年度 | 29年度 | 30年度 | 31年度 | 32年度 | 合 計 |
| 事業規模 | | 23,000 | 43,000 | 39,000 | 35,400 | 32,160 | 172,560 |
| 内訳 | 補助金申請額 | 20,000 | 40,000 | 36,000 | 32,400 | 29,160 | 157,560 |
| | 大学負担額 | 3,000 | 3,000 | 3,000 | 3,000 | 3,000 | 15,000 |

| 13. 本事業事務総括者部課の連絡先 ※選定結果の通知等の事務連絡先となります。 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 部課名 | | | 所在地 | |
| 責任者 | ふりがな<br>（氏名） | | （所属・職名） | |
| 担当者 | ふりがな<br>（氏名） | | （所属・職名） | |
| | 電話番号 | | 緊急連絡先 | |
| | e-mail（主） | | e-mail（副） | |

※原則として、当該機関事務局の担当部課とし、責任者は課長相当職、担当者は係長相当職とします。
e-mail（主）については、できる限り係や課などで共有できるグループメールとし、必ず（副）にも別のアドレスを記入してください。

（大学名：千葉大学）（タイプA－②）

## 事業の目的・概要及び交流プログラムの内容　【１ページ以内】

事業の目的・概要及び相手大学と実施する交流プログラムの内容について、以下の①～④を記入してください。

### ①　事業の目的・概要等

【事業の目的及び概要】

本事業は、我が国唯一の園芸学研究科と工学研究科が連携し、植物環境において、先端技術を実践的に応用したプログラムを実施するものである。園芸学研究科が実施する植物栽培環境プログラムと、工学研究科が実施するイノベーション・プログラムの両方を混合し、自らの研究領域にこだわらず、農業、IoT、ロボットや AI などの理工系分野に加えて、食品流通経済、都市公園政策などの社会科学系分野に至る多様な領域を学び、千葉大学の目指す文理混合による新たな専門領域を生み出すプログラムとして実施するものである。そのため、主たる対象は、園芸学研究科と工学研究科の大学院生となるが、プログラムで開設する科目は全て新たな大学院教養教育と位置付けて研究科共通科目として試行する。これらを含め、本プログラムは以下の4つの特徴を持っている。

(1)都市における新しい6＋4次産業を担う人材を育成

現在、農林水産省が推奨する「6次産業化」は、産業の変革を伴う農山漁村の活性化を目指している。本プログラムでは、これを都市で展開し、サービスデザインの手法を取り入れ、都市農業、都市緑化の新たなビジネスを創出することを目的として、6次産業に4次産業のサービス・イノベーションを付加した、6＋4＝10次産業を創出し、その未来を支える人材を育成する。都市の環境改善や都市農業は世界に共通した問題であり、とりわけ日本・韓国・中国のように似たような文化を持つ圏域において、共通認識をもち、改革を進めることは必須である。

(2)異なる領域のダブル・ディグリー（農学＋工学）のイノベーション人材（修士・博士）

6＋4次産業に適した人材は、柔軟でかつ多様な知識と発想が必要となる。そのため、2つの専門の学位を有する人材を育成するプログラムを構築する。これを、学部と大学院で専門領域を変更するSwitch Major Double Degree Program（SMDD）として位置付ける。本事業でのSMDDは、工学と園芸学の修士や博士の学位を基本とする。本事業の前身となる「植物環境デザイニングプログラム」で構築した学内初の工学と園芸学の共同プログラムを充実発展させ、異なる2つの専門の学位を取得できるプログラムを構築する。

(3)多様な学位を選択できるトリプル・オプション・ディグリー・プログラム

プログラムでは、ダブル・ディグリー（DD）、SMDDにプラスして、新たな枠組みとしてトランスファラブル・ディグリー（TD）の設置を目指す。これは、入学時と修了時の大学が異なるもので、学位は修了時の大学から授与され、学習証明を入学時の大学（及び交換留学先の大学）より授与される。これら3種類のプログラムでは、修士課程では最短1．5年、博士は最短2年の在籍で学位を取得できる多様なカリキュラムを開発する。

(4)大学院における教養を涵養する総合科学のワールド・スクールでの実施

園芸学研究科と工学研究科及び海外の大学と共同して構築するプログラムには、専門外の学生が履修可能な授業も設置する。これらは、大学院レベルでの幅広い教養を涵養するものであり、総合科学科目とし、実施母体をワールド・スクールとして位置付け、広く世界に向けて発信していく。

【養成する人材像】

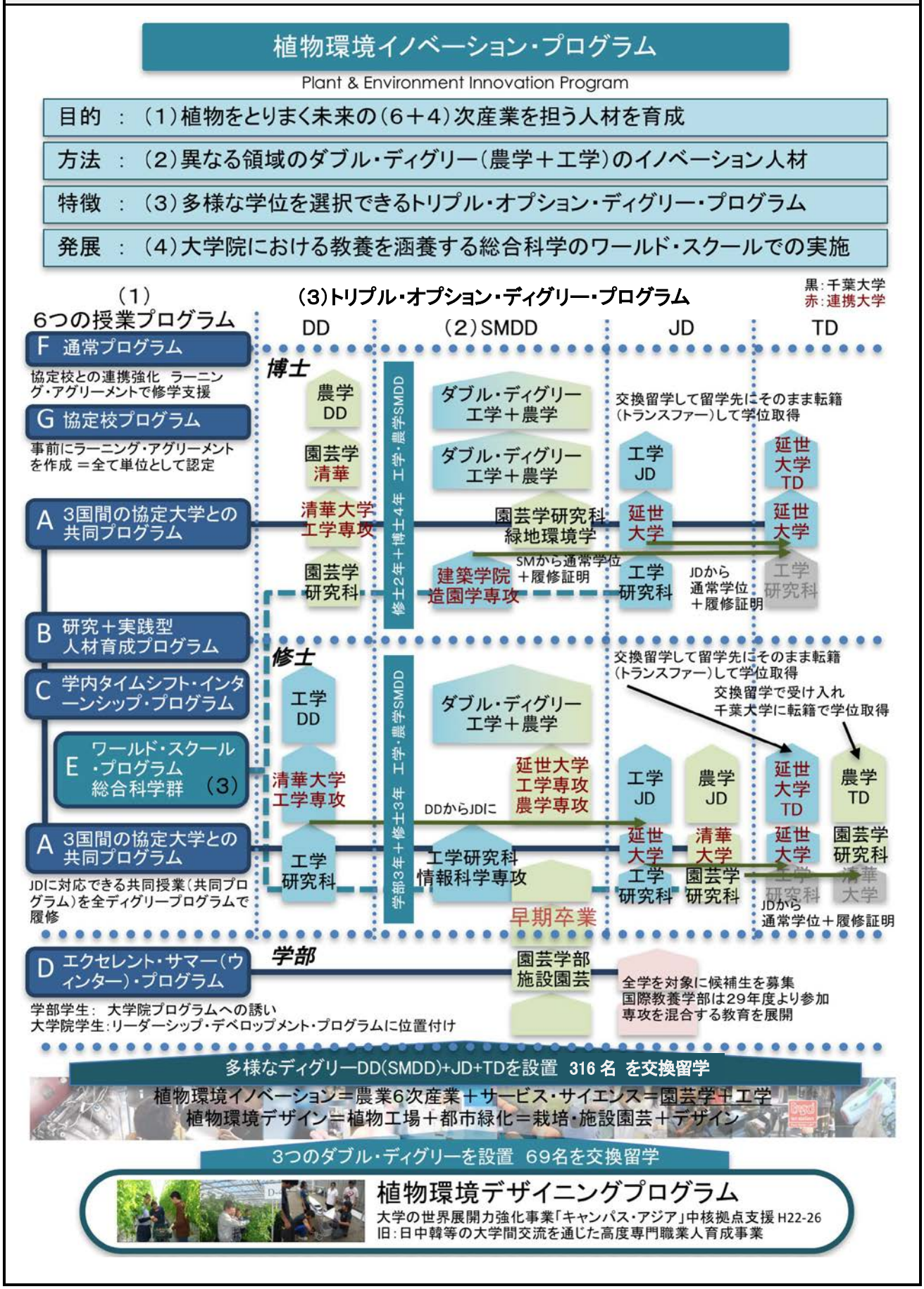
本プログラムでは、都市における植物環境のイノベーションに貢献できる人材を、清華大学（中国・北京）・浙江大学（中国・杭州）・延世大学（韓国）の3大学と連携し、日本・韓国・中国という稲作を基盤とした食文化を持つ東アジアにおいて都市農業や都市緑化への革新的な提案ができる人材として育成する。植物環境に関わる産業は、6＋4次産業として進化することが予測できるため、園芸学（農学）と工学の両方の領域に長けた人材で、かつ日本－中国－韓国の3国で植物環境のイノベーションを企画・提案・実施できる人材を育成する。将来的には、技術立国日本の最先端技術で、都市における6＋4次産業化を実現し、「新たな植物環境イノベーション」に資する人材となる。

【本事業で計画している交流学生数】各年度の派遣及び受入合計人数（交流期間、単位取得の有無は問わない）

| 平成 28 年度 | | 平成 29 年度 | | 平成 30 年度 | | 平成 31 年度 | | 平成 32 年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| ２０人 | ２４人 | ３２人 | ３１人 | ３８人 | ３３人 | ３５人 | ３７人 | ３２人 | ３４人 |

## ②　事業の概念図　【１ページ以内】

※国内複数大学による申請の場合は、それぞれの大学の連携内容や役割分担が分かる図を③に作成してください。




（大学名：千葉大学）（タイプ：Ａ－②）

## ③　国内大学の連携図　【１ページ以内】

※国内の大学が複数連携して実施する取組の場合は、それぞれの大学の役割分担が分かる図を作成してください。

なし

## ④　交流プログラムの内容　【２ページ以内】

○　我が国の大学間交流促進の牽引役となるような先導的な事業計画であり、大学の中長期的なビジョンのもとに戦略的な交流プログラムを実施するものとなっているか。
○　単位の相互認定や成績管理等の質の保証を伴った日本人学生の海外留学及び外国人学生の受入の双方向の交流を促進できるような交流プログラムとなっているか。
○　将来グローバルに活躍できる人材像とそれに基づく交流プログラムの設定や提供（外国人学生に対する企業等における体験活動の実施を含む）を行うものとなっているか。
○　キャンパス・アジア（ＣＡ）の基本的な枠組みを踏まえた事業となっているか。
○　タイプＡ－①においては、キャンパス・アジアパイロットプログラムへの参加実績をベースとして、さらに高度化した取組、あるいは先進的な教育プログラムに取り組むものとなっているか。

【実績・準備状況】

千葉大学は、平成23年に国際化の方針を改訂し、「グローバル・キャンパス・千葉大学」のもと、全学で「世界を先導する教育・研究を促進する大学を目指し、グローバルに活動する大学を推進する」ことを目的として、国際教育推進と国際研究推進を展開している。さらに、平成26年4月に、「千葉大学改革構想」を策定し、現在の9つの学部を、理系、生命科学系、文系の3つの領域で束ね、それぞれの高嶺の人材になることを目標とした「TRIPLE PEAKS CHALLENGE」で、技術・医療・起業のエキスパートを輩出することを目指している。これは、大学のスローガンである、「つねに、より高きものをめざして」を受け、めざすべき頂の目標を設定したものである。

千葉大学では、キャンパス・アジアに先駆けて実施された、『日中韓等の大学間交流を通じた高度専門職業人育成事業（のちに「大学の世界展開力強化事業「キャンパス・アジア」中核拠点支援に統合」）において、「植物環境デザイニングプログラム」が平成22年に採択され5年間の実施後平成26年度に終了している。本プログラムでは、3つのダブル・ディグリーを設置することができ、交換留学した学生は、のべ69名に上っている。この間修士のダブル・ディグリーは6名、博士は4名の計10名が入学、4人が学位を取得し、6人が在籍している。プログラムは最終的に「S」評価を受け、極めて優れたプログラムであるとの評価を得た。本プログラムは、この「植物環境デザイニングプログラム」の発展系であり、植物環境（栽培・施設園芸）とデザイン（サービス・デザイン）の連携実績を、植物環境とイノベーションの混合プログラムとして、園芸学研究科と工学研究科全体に拡大し、同時に中韓の協定大学と多様なダブルディグリープログラムの構築や、新たな学位授与のシステムとしてのトランスファラブル・ディグリー・プログラムの確立を目指して、都市における新しい6＋4次産業化に貢献する人材を育成する。

一方で、千葉大学では、新たな教養教育を目指し、平成28年度に国際教養学部を設置し、「文理混合の教育」を推進している。本事業では、この理念を大学院において実践するために、卓越した「文理混合型」の教育・研究を実践するプログラムを構築し、千葉大学の目指す未来志向型人材の育成を大学院レベルで実施する。本プログラムのベースとなる植物環境デザイニングのプログラムでは、以下のような3つの大きなプログラムを設置し、実施することができた。このような十分な実績をもとに新たなプログラムを実施していく。

1 「大学―海外協定大学―企業」の連携による実践型人材育成プログラム（PBL プログラム）

企業等からの専門家を招聘し、実践型授業としてのプロジェクト型授業を実施。海外の学生は、ワークショップ参加のショートプログラム（10日～20日間）と、交換留学生へのセメスタープログラム（3か月～1年）を実施した。

2 「学内インターンシップ・プログラム」と「ロングターム・インターンシップ・プログラム」

西千葉キャンパスには2つの屋上緑化研究施設が、柏の葉キャンパスには7棟の大規模な植物工場が存在するが、これらの施設において企業の専門家の指導を受けながらインターンシップを実施してきた。これは、学内で企業と連携してインターンシップを行うもので、授業とインターンシップを時間的なロスなく同時に受講できるメリットがあった。また、2ヶ月以上のインターンシップは、「ロングターム・インターンシップ・プログラム」として授業登録し、より実践的な成果を要求する内容で実施した。

3 「植物環境デザイニング」共通プログラムとしての4プログラムによる園芸―工学共同教育

植物環境デザイニングは、園芸学と工学が初めて共同で設置したプログラムであり、研究科横断型で新しい英語授業を開設した。園芸学の学生にとっての情報システム学、インダストリアル・デザイン学受講や、工学の学生にとっての栽培学、施設園芸学受講は新たな試みであり、園芸と工学の知識の混合が実現できたプログラムと言える。ここで開設した授業は現在も継続しており、全て本事業の一部として位置付けられている。

【計画内容】

本事業では、都市における新しい6＋4次産業を担う人材の育成を目標として、多様な知識を獲得して挑まなければならない新たな領域に、異なる領域のダブル・ディグリー（農学＋工学）をフラッグシップ・ディグリー・プログラムとして実現（修士・博士）することを目標としている。このフラッグシップ・ディグリー・モデル・プログラムを筆頭に、学生の園芸学・工学の両方への興味の深化と、学習期間との兼ね合いを図り、多様な学位を選択できるように設計する。本プログラムでは、ノーマル・ディグリー（通常学位　以後ND）、ダブル・ディグリー(DD)、トランスファラブル・ディグリー(TD)の全てのディグリー・プログラムを包含し、通常のNDを除いた、2つの領域や大学で学ぶプログラムの考え方を3つ設計し、学生が選択することができる「トリプル・オプション・ディグリー・プログラム」を設置するものである。このトリプル・オプション・ディグリー・プログラムは、下記の6つの授業科目群で構成されており、これらを目標とするディグリーによって組み合わせることで、修士・博士の多様な学位を取得することを実現する。

(A)3国間の協定大学との共同プログラム(修士20単位＋博士12単位構築)

これまでの実績を生かし、4大学間で共通の共同のプログラム(授業)を設置する。この授業は将来的な設置を検討しているジョイント・ディグリー(JD)の共同学習部分となる。本プログラムでは、共同授業を園芸学研究科と工学研究科にそれぞれ、修士課程で5科目10単位、博士課程で3科目6単位、設置する。設置予定の科目の一部を下記に示す。これらの科目の一部については、MOOCとして提供することを前提にビデオ教材システムや学内のビデオ・アーカイブ・システムを利用したものとする。これにより、反転学習及びディスカッションベースの授業を実施が可能となる。さらに、共同授業科目のうち、専門性を持ちながらも他の研究領域の学生が受講可能なものを、「ワールド・スクールにおける総合科学の科目群」とし、学内及び協定大学に大学院総合科学科目として提供する。いずれも、実践的かつ最先端の技術に関わる科目であり、海外のニーズに合った科目を構築する。

表1　設置予定科目群の一例　(WS は大学院の総合科学科目(ワールド・スクール)として実施する科目)

| | 対象学年 | 授業科目 | 概要 | 単位数 | WS |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 修士 | デザイン・シンキング | デザイン・シンキングのメソッドを学ぶ | 1 | ○ |
| 2 | 修士 | インクルーシブ・アグリ・ビジネス | 地域共生型の農業システム | 1 | ○ |
| 3 | 修士 | 垂直農業 | 都市型農業システム | 1 | |
| 4 | 修士 | アグロインダストリー | 英語によるインターンシップ・プログラム | 1 | |
| 5 | 修士 | フードシステムのサービスインフォメーション | 6次産業とフードシステムに関する特別講義 | 1 | |
| 6 | 修士 | エディブルランドスケープ | エディブルランドスケープに関する提案型プロジェクト | 2 | ○ |
| 7 | 博士 | プラント・シアター | 農業の劇場化による価値の変革 | 1 | |
| 8 | 博士 | アグリ・ビックデータ | 植物工場におけるビックデータ利用 | 1 | ○ |
| 9 | 博士 | ランドスケープとフードシステムのためのサービスデザイン | 生産者と消費者のインターラクション | 1 | |
| 10 | 博士 | 農業6＋4次産業化 | 農業の6＋4次産業における価値創造 | 2 | ○ |

(B)研究＋実践型人材育成プログラム(PBL プログラム)(8単位構築(既存 PBL も利用)

「大学―海外協定大学―企業」の連携による実践型人材育成プログラムをベースに、理論と実践の両方を全ての専門の学生が受講できるようにする。この PBL プログラムは従来短期型のものが多かったが、より実践的にするために、千葉大学で平成28年度より実施している2ヶ月ごとのターム制に合わせて年間6つの PBL を設置し、テーマに応じて学生が選択するシステムを実施する。

(C)学内タイムシフト・インターンシップ・プログラム(短期2単位・長期4単位)

インターンシップだけの在学期間を設けるのではなく、連携企業と協議し、西千葉及び柏の葉のキャンパスにおいて、例えば9:00-12:00インターンシップ、午後は授業、月ー火曜日インターンシップで水ー金曜日授業など、時間や期間をずらし(タイムシフト)有効に利用することで、同時平行のインターンシップを実施する。学外のインターンシップもこのタイムシフト・インターンシップ・プログラムを積極的に推進する。

(D)エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム(2単位10プログラム構築)

この授業は、対象範囲を協定校の学部学生に広げ、将来どのような授業を学習及び研究が可能かを体験することができるプログラムとして実施する。実施は、6―8月、1―3月の期間に1～2週間のプログラムとして年間6回の予定で実施し、未来のプログラムの候補者を獲得する。修士・博士の学生は、プログラムのリーダーとして参加し、自らの成果を発表しながら学部学生と新たな課題に挑むことで、プロジェクト・リーダーとしてトレーニングを行うリーダーシップ・デベロップメント・プログラムとなっている。

(E)ワールド・スクール　総合科学科目群(10単位～)

本プログラムの実施母体となる園芸学研究科・工学研究科で開講されている授業の中で、プログラムに関連があり、かつ、他の研究科の学生も受講可能であるプログラムを選定する。これらは、大学院レベルの教養科目として、総合科目群として全学に開放する。英語で開講することで、留学生にとっても受講可能なプログラムとして、(B)(D)のプログラムからも選定される。

(F)通常プログラム(10単位～)

本プログラムの実施母体となる園芸学研究科・工学研究科の授業のうちで、ディグリーの母体となる専攻の従来のプログラムが対象となる。受入留学生も受講可能なプログラムであるが、大多数は日本語で実施される。授業概要については、協定大学に授業内容を説明することで、留学生が帰国後に単位として互換されるようにする。これらの科目は、事前にラーニング・アグリーメントを作成する必要がある。

(G)協定校プログラム(10単位～)

協定校において実施する授業は、全て単位として認定する。このうち、千葉大学の単位に互換可能なものは、事前にラーニング・アグリーメントをかわし、留学修了後に千葉大学の修了要件の対象となる単位として認める。

以上のような7つのプログラムで構成する。

このプログラムを例えば、NDであれば、(A)10単位＋(G)10単位＋(B)(C)(D)(E)(F)から10単位、で学位を取得できる。DDであれば、これにさらに20単位を取得することになる。またTDもNDと同様に、(A)10単位＋(G)10単位＋(B)(C)(D)(E)(F)で10単位で学位を取得できる。このように履修することで、学生がND⇄DD⇄TDと学習の進化と学習期間に合わせて取得することができるものになる。

## 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成　【①、②合わせて２ページ以内】

交流プログラムの質の保証のための取組内容について、実績・準備状況を踏まえて、計画内容を具体的に記入してください。

### ① 交流プログラムの質の保証について

○　透明性、客観性の高い厳格な成績管理（コースワークを重視したカリキュラムの構成、ＧＰＡの導入や教員間の相互チェックなど）、学生が履修可能な上限単位数の設定、明確なシラバスの活用等による学修課程と出口管理の厳格化に努め、単位の実質化を重視しているか。

○　交流プログラムを実施するに当たり、単位の相互認定や成績管理、学位授与に至るプロセスが明確になっているか。

○　国際公募による外国人教員の招聘や海外大学での教育経験又は国内大学で英語等による教育経験を有する日本人教員の配置、海外連携大学との教員交流、ＦＤ等による教員の資質向上など、質の高い教育が提供されるよう交流プログラムの内容に応じた教育体制の充実が図られているか。

○　大学院レベルの交流においては、ダブル・ディグリーもしくはジョイント・ディグリーの実施を目指すものとなっているか。

【実績・準備状況】

本事業は、全てのプログラムを大学間交流協定及び学生交流協定を締結した協定大学と行う。そのため、全てのカリキュラムの単位互換が可能であるとともに、ラーニング・アグリーメントのもと事前に十分に授業やプログラムについて検討し派遣・受入を実施する。このラーニング・アグリーメントが可能であるのは、平成27年度中に全ての授業のナンバリングが終了し、カリキュラムマップによりカリキュラムの体型を明確に提示しているからである。さらには、シラバスの二ヶ国語化も工学・園芸ともに完了している。

また、修士課程の新たな履修キャップ制度を設け、年間30単位以下の取得を厳守する。GPAについては、平成16年より導入している。これに加え近年では、GPCA(Grade Point Class Average)を導入し、S,A,B,C,DでC以上を合格とし、S,Aを全体の30%程度にするという厳密な成績管理を行っている。本事業で実施するカリキュラムもこの基準を適用する。本事業では、博士課程、修士課程の学生が参加し、多様な学位の取得にチャレンジする。一方で、千葉大学では、大学院における共通教育プログラムの実施を始めた。以下の表のように、これまでの実績にともなうプログラムは、各々の専門性の高い授業と、普遍性の高い授業とに分けながら運営する。特に、修士課程においては、本年度設置の(E)ワールド・スクール　総合科学科目群（10単位～）の科目とし、研究科を横断する領域の科目を、普遍性の高い授業として、本事業においても実施する。

表2　本事業として認定できる現在開講されている授業科目
（WS は大学院の総合科学科目（ワールド・スクール）として実施する科目）

| | 対象学年 | 授業科目 | 概要 | 単位数 | WS |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 修士 | 施設園芸学特論 | 植物工場に必要な設備・環境調節について | 2 | ○ |
| 2 | 修士 | 施設園芸プロジェクト演習・実習 | 施設園芸に関わる新たな設計と提案 | 2 | ○ |
| 3 | 修士 | エキスパートプログラム・エキスパート演習 | 植物工場専門家によるフィールド型演習 | 2 | |
| 4 | 修士 | 国際インターンシップ | 英語によるインターンシップ・プログラム | 2−4 | |
| 5 | 修士 | アグリフードシステム | 6次産業とフードシステムに関する特別講義 | 2 | ○ |
| 6 | 修士 | 人間植物関係学 | 人と植物環境の関係のあり方に関する特別講義 | 2 | |
| 7 | 博士 | 緑地デザイン学 | 緑地のデザインとそのあり方 | 2 | |
| 8 | 博士 | 国際園芸学概論 | 日本及びアジアの園芸学を概観し未来を予測する | 2 | ○ |
| 9 | 博士 | プロジェクト・マネージメント概論 | プロジェクトの管理とその運営について | 2 | ○ |
| 10 | 博士 | 国際インターンシップ | 英語によるインターンシップ・プログラム | 2-4 | |

【計画内容】

●教育課程による認証で厳格な授業・成績管理

本事業は、園芸学研究科と工学研究科（及び他研究科）の複数の研究科が連携して実施するプログラムである。このプログラムの一番の波及効果は、大学院レベルにおける共通教育の、学内＋学外＋国内＋海外での実施である。これらのプログラムは、すべて正規の授業として実施するもので、厳格な成績管理を行い、単位の実質化を重視している。本事業では、共同の授業と、協定大学での個別の授業の2つを実施する。さらに、千葉大学及び協定大学の授業のうち、本プログラムで、単位互換の対象とするプログラムは、シラバスによる内容確認を十分に行い教育課程において授業科目の一覧表を作成し、シラバスの内容により互換可能な授業を決定する。この教育課程による単位互換の確認は、すでに工学研究科で実施しており全学に適用する。

●協定大学の教員による総合科学科目プログラムの実施

本事業では、これまでの実績をもとに、協定大学から積極的に教員を特別招聘する。千葉大学では、6ターム制による授業を平成28年度より実施しているため、中国の大学からの教員には、第2タームの6～7月に授業を担当してもらう。韓国の教員には第3タームの8～9月に授業を担当してもらう。これらの教員のプログラムは、大学院の総合科学科目として、学内の全研究科の大学院生に開放する。このように、本事業では、新たな教員を新規に採用するのではなく、協定大学の教員をクロスアポイントメントで採用することで、特別招聘教員としてプログラムを実施してもらう。これにより、本プログラムに参加する修士及び博士の学生の国際共同研究も推進することができ、プ

ログラムの周辺領域への波及効果も期待される。なおプログラムは全て英語で実施するが、そのために必要な教員は充分に在籍している。

**●JD 開設のための共通授業の設置**

本プログラムでは、ND、DD、TD の3つの学位プログラムを自由に選択できるようにするが、すべての参加学生には、将来的な設置を検討しているジョイント・ディグリー（JD）の共同学習部分である共通授業を履修の必修要件とする。そのため本授業では、14単位の共通授業を設置する。このうち、6単位3科目は、日中韓の3つの大学で共通の科目として設置する。また、日中では4単位2科目、日韓も4単位2科目の合計14単位を設置する。これにより、日中間でも日韓間でも10単位5科目の共通科目が設定されることになり、JD の開設に求められる共通授業の10単位を満たす履修の構造となる。

**●SULA による学習指導**

また、教員による学習指導だけではなく、職員についても千葉大独自の職員である SULA(Super University Learning Administrator)とともに、学生の学習指導を実施する。この SULA は、学部だけではなく、より専門性の高い大学院レベルでも十分機能するものであり、大学院レベルでの全額導入を実施する。そして、これらの成果を全て高等教育研究機構が実施する全学 FD 研修会や SD 研修会で報告し、教員及び SULA 間で共有する。

## ② 相手大学（相手国）のニーズを踏まえた大学間交流の展開

○ 相手大学における単位制度（授業時間を含めた学習量や単位の換算方法等）、学生の履修順序、単位の相互認定の手続、アカデミックカレンダーの相違等について留意し、交流プログラムの内容に応じたサポートの実施等により、学生の履修に支障がないよう配慮されているか。

○ 短期の交流から学位取得を見据えた長期の交流までの様々な形態の交流を含む多層的な構成で、大学間交流の発展に繋がるような柔軟で発展的な交流プログラムの構成となっているか。

○ 各国の人材育成ニーズに合わせた教育の提供に留意したものとなっているか。

**【実績・準備状況】**

本プログラム協定大学は、延世大学（韓国）、清華大学（中国・北京）、浙江大学（中国・杭州）である。現時点で連携する3校は、いずれも韓国・中国を代表するトップスクールである。この3大学とは、すでに3つの DD プログラムと2つの教育・研究連携プログラムが設置されている。本プログラムでは、これらをさらに拡大し、新たな DD と TD を設置し、JD の設置準備を行う。これまでの JD における討議を踏まえ、双方の学生のメリットや、新専攻設置にともなう最低人数に対する考え方をまとめ、今回の TD の設置と、将来的な JD の設置の2段階で多様なプログラムを計画するに至っている。このように、本プログラムにおいて新たな学位プログラムとして設置する TD は、JD への転換も包含したものとなっており、TD として設置する際に JD と同一のカリキュラム構造で設置し、将来的に JD へ移行可能なものとして運営するものである。これら全ては、それぞれの協定大学の単位の基準に準拠しているとともに、カリキュラムとして構築可能であることを4大学で合意している。また、プログラム実施中の5年間に、韓国は KAIST、POSTECH など、中国は南京農業大学、北京林業大学、広州美術学院など、戦略的に単科大学と連携し、韓国から1校、中国から2校をプラスし、最終的に千葉大学を含め最大7校で実施することを目指している。

**【計画内容】**

本プログラムは、園芸学研究科と工学研究科が共同で行うものであり、これまでの実績のもとに実施するプログラムである。本プログラムでのフラッグシップ・モデル・プログラムは、工学と園芸学（農学）の2つの異なるディグリーを取得するものであり、まさに、都市における新しい6＋4次産業を担う豊富な知識を有した人材である。このような全く異なる2つのディグリーを目指すプログラムを、 SMDD（Switch Major Double Degree）プログラムと呼び、千葉大学の目指す、学問領域の混合（ブレンド）」による新たなる人材の育成を大学院レベルで実施するものである。このフラッグシップ・モデル・プログラムは、図のようにまず早期卒業を利用して3年で学部を卒業し、次に3年間を費やし、千葉大学で工学を学んだ学生は千葉大学の大学院で園芸学を専攻、清華大学の大学院で工学を専攻する（学部園芸学ならば、工学研究科＋浙江大学で農学）。学部の専攻から大学院を他の専攻にスイッチし、さらに留学先では元の専攻に再スイッチすることで、2つの異なる学位を修士課程において取得する。千葉大学の大学院では、あえて専門外を学び学位を取得することで、海外での授業・研究をスムースに推進するようにする。

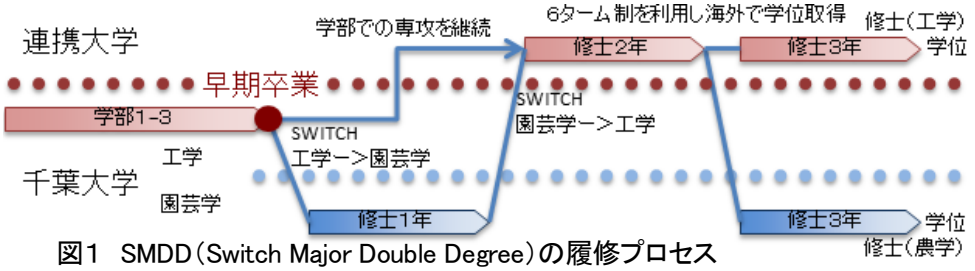



図1　SMDD（Switch Major Double Degree）の履修プロセス

## 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備　【①～③合わせて２ページ以内】

交流プログラムの実施に伴う受け入れる外国人学生及び派遣する日本人学生に対する生活や学修及び就職への支援やそのための環境整備について、①～③の内容を実績・準備状況を踏まえて、計画内容を具体的に記入してください。

### ① 外国人学生の受入のための環境整備

○　外国人学生の在籍管理のための適切な体制が整備されているか。

○　受け入れた外国人学生が学業に専念できるよう、履修指導、教育支援員・ＴＡ等の配置、学内外での諸手続き支援、カウンセリング、宿舎、学内各種資料の翻訳、就職支援等のサポート体制の充実が図られているか。

○　単位認定可能な科目、履修体系・順序、単位の相互認定の手続、アカデミックカレンダーの相違等について、学生の履修に支障がないよう十分な情報提供を行う体制がとられているか。

○　国内外でのインターンシップ等による企業体験の機会確保や、外国人学生の国内就職説明会参加、産業界からの講師等の派遣など、産業界との連携が十分に図られているか。

【実績・準備状況】

本学に在籍する留学生は、学位取得目的の学生と協定校からの短期留学等の学生に区分できる。学位取得目的の学生は、国費留学生や外国政府派遣留学生と、私費外国人留学生がいる。これらの留学生の学習面・生活面の支援については、全学的には留学生課と国際教育センターを中心として、各部局の留学生担当教職員と密接に連携しながら進められている。留学生課にワンストップサービス機能を備えたインターナショナル・サポート・デスク(ISD)を設置し、留学生はすべての情報を入手しサービスを受けることのできる体制ができている。ISD には専門スタッフを5名配置し、英語・中国語・韓国語での対応が可能となっている。また、ISD は、ホームページで、入試・住居・在留資格・奨学金・保険・キャンパスライフ・授業・学費・就職など必要な情報をすべて網羅し英語で情報を提供している。国際教育センター担当の教員は、科目履修、日本語科目履修など教学面の指導を行っている。一方 ISD 職員は、留学生と一緒に銀行や市役所等に出向き、必要な手続きを支援し日本での生活にスムースに溶け込めるようしている。ISD では窓口以外にもメールで留学生の相談に応じ、24 時間体制で留学生に対応している。また、学習面では、教員ばかりでなく、留学生各々にチューター（大学院学生）がついて相談や指導を行っている。また各部局でも、学務担当に外国語対応職員を配置し、留学生課と連携して適切な対応ができるようにしている。本事業でも、この ISD が対応するため、サポート体制は万全である。

【計画内容】

本事業では、新たに共同授業を設置する。そのために、協定校の教員との綿密な連携を既に開始している。授業概要は既に述べたように、協定校のアカデミックカレンダーに合わせ、4月と8月の春と秋の両方のタームより学生が参加できるように授業を構築する。新規に設置する科目は、すべて1単位科目として、1ターム毎（2ヶ月毎）のプログラムとして留学生が受講しやすいようにする。またこれには、SULAが必ず対応し、履修指導、教育支援を行うと共に、プログラムのメンバーからチューターとして日本人学生を選抜しサポートさせる。

一方、(C)学内タイムシフト・インターンシップ・プログラムは、連携企業に受入の依頼をしており、プログラム開始後には日中韓の学生を日本の企業で受け入れについて内諾を得ている。もちろん、PBLプログラムは、企業にテーマスポンサーになってもらうため、必ず連携企業から講師を派遣してもらう。さらに、企業には、プログラム修了後（学位取得後）の外国人留学生の雇用も視野に入れて協力を依頼している。なお本年度より、日本人と留学生の混住型寮を開始した。本プログラムの学生は優先的に混住型寮への入寮ができるようにする。

### ② 日本人学生の派遣のための環境整備

○　留学中の日本人学生が学業に専念できるとともに、帰国後の学業生活や就職活動等にも支障のないよう、留学中の日本人学生への必要な情報の提供やインターネット等を通じた相談体制の構築等がなされているか。

○　日本人学生に対して、海外への派遣前から帰国後にわたり、履修面・学習面・生活面にわたるサポート（履修指導、交流に関する情報の提供、相談サービスの実施、就職支援等）が推進されているか。

○　単位認定可能な科目、履修体系・順序、単位の相互認定の手続、アカデミックカレンダーの相違等について、学生の履修に支障がないよう十分な情報提供を行う体制がとられているか。

○　留学中の日本人学生の安全管理に関する体制が十分に取られているか。

○　国内外でのインターンシップ等による企業体験の機会確保や、産業界からの講師等の派遣など、産業界との連携が十分に図られているか。

【実績・準備状況】

留学中の学生への個別支援は、全学の派遣推進の母体となるグローバル・リソーセスと、学生の指導教員が連携して行っている。このグローバル・リソーセスには、学務に特化した職員であるアマヌエンシスが在籍しており、留学に関する支援を積極的に行っている。これ以外に、研究科学務係、留学生課、国際教育センターがサポートするという何重もの支援体制を構築しているため、安心して留学できている。一方、1ヶ月以上協定校に留学している学生のうち、3ヶ月未満は帰国後に、3ヶ月以上は毎月レポートを提出させ、授業に関することと生活（健康管理など）に関することの両方について確認している。本事業でも、このグローバル・リソーセスとアマヌエンシスの体制を利用して派遣学生に対応する。また、危機管理については、留学生課が主体となり、外部の危機管理サービス「留学生危機管理サービス OSSMA（オスマ）」（日本エマージェンシーアシスタンス株式会社）と、大学で契約し、平成23年度より利用しており、迅速な情報サービスが可能となっている。

【計画内容】

本プロジェクトでは、留学前・留学中・留学後のトータルな派遣体制を構築して以下のように留学を支援する。

1.《留学前》 本プロジェクトは、園芸学と工学を中心に全学を対象に行い、プロジェクト・マネージメントは、全て高等教育研究機構、グローバル・リソーセス、留学生課の全学組織により実施する。選抜された学生は、全学のプログラムである留学事前学習プログラムを利用し、海外文化や日本文化学習を含め準備することで十分な留学前の準備が可能となる。本プログラムでは、基本的には全ての授業の単位を互換対象とする。そのため、協定校の授業でも、千葉大学の授業を受講しているかのようなスムースな単位互換が可能である。さらには、派遣予定の学生は、カリキュラムの構造や留学先の講義科目などについては留学前の期間に熟読し、さらに SULA が必要に応じて学生毎にラーニング・アグリーメントを獲得し十分な準備を行う。

2.《留学中》 修学の内容については、SULA と教員が一丸となって支援する。本プロジェクトは、多様な学位の取得について様々な選択肢が用意されている。そのため、留学中においても、最終学位や留学期間を変更することが自由にできる。これらを実現するためには、SULA による大学院レベルでの学習支援が不可欠である。そこで、本プログラムでは、教員と SULA が一丸となって大学院レベルでの学習プログラムの構築を学生ポータルで実現する。デジタル・ポートフォリオに学習プログラムの情報をすべてリンクさせ、修学を日本からも支援する。

一方、現地の危機管理は、延世大学 IEC オフィス（設置予定）、浙江大学 IEC オフィス、北京事務所、で対応する。また、そればかりではなく、現地の千葉大学中国校友会と千葉大学韓国校友会のネットワークを最大限に利用し、安全な生活が送れるようにすることで、より一層の安心感を与える。

3.《留学後》 事前学習と同様に、事後学習の一貫として、留学した学生を集めての留学報告会を開催する。併せて必要な指導、フォローアップも実施する。留学報告会は、留学した学生の最終報告であると同時に、次回派遣される学生の目的意識の明確化、さらには留学希望学生への多様で多彩な情報の提供の場であり、留学数拡大のスパイラルアップに重要な役割を担っている。

また、学位審査については、協定大学の教員を修士・博士の学位審査の外部審査委員とする。SD や TD であっても、協定大学の教員を外部審査委員として審査委員会を構成し、グローバルな環境での審査を実現する。

4.《インターンシップと就職》

留学で学生が心配するのが就職である。就職活動に近い学年で留学する場合は、学生と密に連絡を取ることで、学生の希望を各企業に伝え、グローバル人材が就職可能であるかを確認する。特にインターンシップなどは、帰国後すぐに参加できるように手配するだけでなく、(C) 学内タイムシフト・インターンシップ・プログラムなどを利用することを推奨する。また、(B) 研究＋実践型人材育成プログラム（PBL プログラム）のように、「大学−海外協定大学−企業」の連携による実践型人材育成プログラムも存在するため、この中で興味のある企業に対してアプローチすることも可能であり、就職やインターンシップの機会を十分に保証するプログラムとなっている。

**③ 関係大学間の連絡体制の整備**

- ○ 外国人学生及び日本人学生へのサポートが円滑及び適切になされるよう、関係大学間の十分な連絡・情報共有体制が整備されているか。
- ○ 大学間交流の発展に向け、参加学生の同窓会の立ち上げ等、卒業・修了後の継続的サポート体制の構築等が図られているか。
- ○ 緊急時、災害時の対応のための留学中の日本人学生や受け入れた外国人学生をサポートするリスク管理への配慮が十分になされているか。

【実績・準備状況】

本事業の推進にあたり、平成27年11月に延世大学に、平成28年4月には浙江大学に赴き、本プログラムでの連携予定の教員を訪問し、実施及び実現性について確認した。その際、協定校の国際担当の部門長、海外交流担当の職員、及びプログラム担当予定の専門領域の教員とも打合せを行い、十分な連携体制が確保できることを確認している。また、千葉大学の卒業生にも依頼し、中国及び韓国に既に存在する千葉大学中国校友会と千葉大学韓国校友会にもプログラムの支援を依頼した。なお、全ての大学には、千葉大学の OB 及び千葉大学の教員 OB が、教員として在籍しており、これらの教員と密接に情報を交換し、運営していくことで、十分な危機管理体制の上に、事業の実施が可能である。また、韓国の延世大学に、IEC オフィスの設置を予定しており、留学中の日本人学生には、十分なサポートが可能となる様にしている。

【計画内容】

本事業の実施に会わせて、IEC オフィス及び北京事務所とのテレビ会議システムを導入し、月2回程度の定例の打合せを実施する。また、共同授業を実施するにあたり、講義やプレゼンテーションが可能なシステムも必要に応じて整備し運営する。本事業では、実践型の人材を育成するため、連携する企業も含めたプログラムのコンソーシアムを構築する。また、千葉大学内において、中国・韓国出身の留学生を組織し、本プログラム開始後には、スチューデント・アシスタント(SA)として雇用し、留学生受入支援とプログラム推進支援を依頼する。海外における緊急時には、「いざというときに日本語」で対応できるように、現地 IEC オフィス・現地事務所、海外校友会と二重に連携する。また、受入留学生には、日本人との混住型学生寮を用意し、多様な情報の提供を行う。特にチューターを必ず同一プログラムの上位学年の学生とすることで、日常の生活から、授業の相談、緊急時の対策までシームレスに対応する。

## 事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及　【①～④合わせて２ページ以内】

事業の実施に伴う大学の国際化と情報公開、成果の普及について、①～④の内容を実績・準備状況を踏まえて、計画内容を具体的に記入してください。

### ① 事業の実施に伴う大学の国際化

○　質の保証を伴った大学間交流の充実・発展のため、実施大学だけでなく他大学の学生も参加できる取組が設けられるなど柔軟で発展的なものとなっているか。

○　大学の国際化に向けた戦略的な目標等において、事業の意義及び方向性を明確に位置づけるとともに、相手大学も含めた組織的・継続的な教育連携を実施する体制が構築されているか。

【実績・準備状況】

千葉大学では、グローバル関連プログラムを広く学外に開放している。これまで国立六大学連携（千葉、新潟、金沢、岡山、長崎、熊本）において、グローバル関連のプログラムをアセアンの大学連合である AUN と共同で開発してきた。これ以外にも、千葉大学が実施する海外派遣プログラム「グローバル・スタディ・プログラム」や「グローバル・インターンシップ」なども他大学に開放し、アジア圏をはじめとし、欧州、北米及び中米など世界各国でプログラムを実施している。本事業もこれまでのグローバル関連プログラムの延長線上に位置づけ、同様のポリシーでプログラムを開放する。中でもDDプログラムは、中国、タイ、インドネシア、イタリアで27プログラムを設置している。これらのうちの3プログラムが本プログラムを構築するベースとなっている。

【計画内容】

千葉大学では、TOKUHISA PLAN（学長プラン）の国際化の項において、「ネットワークの構築によるグローバル化」をあげている。本事業で実施するプログラムはこの項を具現化するものである。

国内の大学との連携においては上記の国立六大学との連携によるプログラムの公開と、他大学からの参加を可能とする。国内大学との連携では、六大学以外にも近隣大学と単位互換を開始している。プログラムの一部は、ビデオ教材により事前に学習するシステムとするため、他大学からも参加が容易である。一方、他大学からの海外3大学への留学については、大学ごとに協定を獲得してもらう。このように、必ず大学間の交流協定を締結し、単位互換の保証を伴うものとする。とくに、本プログラム専用に開発する共通授業は、必ず国内の各大学の授業としても履修課程に登録することを義務づける。このように、全体を制度化することで、大学及び部局が認める組織的かつ継続的な教育連携を実施でき、教員だけでではなく、SULA や事務も一丸となって推進する。

### ② 事務体制の強化

○　本事業の取組に対応するため、事務局機能を強化するなど事業をサポートする全学的体制の充実（交流にかかる業務が一部の教職員に偏らないよう、窓口となる担当部署を設定し、教職員間の情報共有、意思疎通や各種問い合わせへの対応、事業運営上の関係者間の調整など）が図られているか。

○　招聘した外国人教員や外国人学生とのコミュニケーションを図れる程度の能力を有する事務職員を配置できるよう、事務職員の能力向上を推進しているか。

【実績・準備状況】

千葉大学は、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援において「アマヌエンシス―学務専門の職員」を、スーパー・グローバル大学創成支援事業において「SULA―Super University Learning Administrator」を提案し、現在まで8名のアマヌエンシスを輩出、2名の SULA が国際教養学部に在籍している。これらの人材は、大学の国際化における教育系の新たな専門職であり、全学的体制で運営・育成している。また、日本人学生の派遣プログラムは、グローバル・リソーセスで一本化して管理しており、本プログラムも同様の事務体制で実施する。一方、外国人留学生の受入は ISD で一元管理しており、学習から生活に至るまで全てを支援しており、機能的にも充実している。現在、課題となるのは、招聘した外国人教員が、各教員と国際企画課による対応となっていることであり、グローバル・リソーセスへの機能一本化を予定している。

【計画内容】

本プログラムでは、延世大学の中に新たに IEC（International Exchange Center）オフィスを設置し、現地で職員を採用する。また、浙江大学の IEC オフィスにもプログラム獲得後は新たに職員を採用する。清華大学のプログラムには、北京事務所の職員が対応する。これにより、3拠点全てに職員が在籍しプログラムの管理・運営をする。また、プログラム採択後には、共通授業のために、拠点ごとに5名以上、年間のべ15名以上の教員を派遣して実施し、現地でのコミュニケーションを円滑にする。一方で、招聘した協定大学の教員（外国人）やプログラムに連携する企業の専門家は、千葉大学における正規授業を実施してもらい連携を強化する。これには、アマヌエンシスや SULA を含めた職員がグローバル・リソーセスで対応する。これらの事務職員は外国人教員とも十分なコミュニケーションがとれる能力を有しており、10年後には、全学でアマヌエンシスや SULA を50人体制にすることで、国際化を推進する。そのために、現在多様な SD（Staff Development 職員研修）を実施しており、3拠点への職員派遣も SD の一貫として実施する。

## ③ 事業の実施、達成・進捗状況の評価体制

○　事業の実施、達成状況を評価し、改善を図るための評価体制が整備されているか。

【実績・準備状況】

教育プログラムの質保証に関しては、運営基盤機構に大学評価部門を設置して、各部局の点検・評価の状況把握を行っている。さらに、全学の自己点検・自己評価についても、運営基盤機構の大学評価部門の責任の下、認証評価、法人評価とは別に毎年度実施し、その結果を公表することで質の保証を行っている。本事業は、大学全体で推進するため、評価についても運営基盤機構の大学評価部門の責任のもと実施する。

一方で、これまでの植物環境デザイニングプログラムでは、産業界の有識者を招聘した外部評価委員会を実施しており、本プログラムでもこの委員会を継続して実施する。また、年に2回協定大学の教員を招聘してプログラムの自己評価を行っていたが、本プログラムでは、3校のみの招聘であるため、外部評価委員会と共同で、より実践的なプログラム開発ための評価を実施する。

【計画内容】

大学の最上位の意思決定及び評価で、外部の評価が可能なのは経営協議会である。現在の外部委員は14名であり、グローバル人材育成に精通した外国人も含まれており、千葉大学のグローバルな取組に対し評価・助言を得ている。この経営協議会で、2ヶ月に一度の報告を実施する。現在、スーパー・グローバル大学創成支援事業のほか、世界展開力の事業は全て報告されており、これらをまとめて報告する。

下部組織としては、図に示すとおりの組織体制で、教育研究評議会及び高等教育研究機構会議での評価を実施する。現在、全学的な教学マネジメントの専門家として、UEA（University Education Administrator）の配置を準備している。UEAは、高等教育研究機構に属する専門の教員であり、本プログラムについて他の情報を多角的に利用し、プロジェクトの評価と様々な提言を行う。

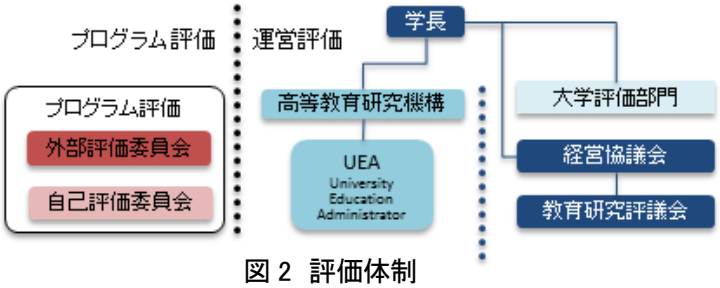



図２　評価体制

このように、プログラムの評価はこれまでのシステムを利用した外部評価委員会で、運営の評価は高等教育研究機構で実施する。

## ④ 国内外への情報提供の方法・体制

○　質を保証する観点や学生の適切な判断・選択に資する観点から、取組の実施状況等や交流プログラムの詳細など必要な情報について、外国語による提供も含め、積極的に情報の発信を行うものとなっているか。

○　中央教育審議会大学分科会国際的な大学評価活動に関するワーキンググループ「国際的な大学評価活動の展開状況や我が国の大学に関する情報の海外発信の観点から公表が望まれる項目の例」（平成２２年６月）が掲げる、国際的な活動に特に重点を置く大学において公表が望まれる項目について、大学のグローバル化に向けた戦略的な国内外への教育情報の発信を行うものとなっているか。

○　取組を通じて得られた成果について、ホームページ等による公表の他、報告会、発表会等の報告の場を設けて、各大学や学生、産業界等への普及を図るものとなっているか。

【実績・準備状況】

千葉大学は本年4月より英語のホームページを完全リニューアルした。従来のポータル・サイトからグラフィック中心のコンテンツ・サイトに変更し、その発信力を高めている。また、この英語のホームページは日本語のホームページと同じメニューであることに加え、千葉大学の「アット・ア・グランス」もトップページにおき、世界に向けて情報発信を行っている。教育関係のコンテンツでは、各種ポリシー等から、シラバス、コース・ナンバリング・システム、カリキュラムツリー、さらには、グローバル人材育成プログラムまで詳細な情報を公開している。国際的な大学評価活動の展開状況や我が国の大学に関する情報の海外発信の観点から公表が望まれる項目の例として挙げられているものの全てにわたって十分な情報発信を行っている。

【計画内容】

これまでに獲得した大学の世界展開力事業も全てホームページを設置し、積極的な情報発信を行っている。中でも本プログラムの前身となる植物環境デザイニングプログラムは、全て英語での情報発信を行っており、動画によるプログラムの紹介、ソーシャルネットワークを利用した情報発信、スマートフォン対応による学生へのリアルタイムな情報発信など、最先端の情報発信を行っている（http://design-cu.jp/plant_factory/）。

本プログラムでは、これまで以上にインターネットを利用し情報を発信する。本事業は、授業の素材を可能な限りインターネット上に置き開放する。連携企業との成果についても、NDA（機密保持契約）に抵触しない範囲で積極的に公開しクラウド化することで、更なる情報の集約にも利用する。プログラムは2ヶ月を単位として次のプロセスに移行するため、最長でも2ヶ月単位で情報をリニューアルし、プログラムを推進する。また、本事業をきっかけに、プログラムのホームページの部分的な中国語化や韓国語化も実施する。

**達成目標**　【①、②、③で２ページ以内、④、⑤はそれぞれ１ページ以内、⑥は交流プログラムの内容に応じたページ数】

本事業を実施することによって達成しようとする目標について、下記の点に留意し、①～⑥に具体的に記入してください。

○　国民にとって分かりやすい具体的な目標が設定されているか。

○　アウトプットだけでなくアウトカムに関する具体的な目標が設定されているか。

## ①　養成しようとするグローバル人材像について

○　本事業において養成しようとするグローバル人材像が明確に設定されているか。

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～平成３２年度まで）

本プログラムでは、修士・博士の両者に共通して身につけて欲しいこととして、技術力や研究力に加えて、広範にわたる都市における新しい6＋4次産業に関する多様な知識、さらには「文理混合」の知識、例えば公共政策と環境技術の両方の「知識」を掲げている。

修士課程では、「植物環境プロフェッショナル人材」を目的としている。日中韓を自由に移動し、都市における新しい6＋4次産業を担う、植物栽培環境のエキスパートとしてのイノベーション人材を育成することを目的としている。また、本プログラムでは、DD,TD さらには SMDD と多様なディグリーを選択でき、学生の修学内容や修学期間に合わせてプログラムを選択できる。この修士課程では、即戦力を伴いながら、日本の都市における新しい6＋4次産業を広くアジアに普及させる人材である。すなわち、植物環境プロフェッショナル人材は、修士の学生を対象に未来のアジアを植物によって変革することができる人材を育成するものである。

一方、博士課程においては、都市における新しい6＋4次産業に必要な人材を育成する「研究者（教員）」を育成する。日中韓という似た食文化を持つ圏域で、新たな視点で研究に取り組む人材として、我が国の技術で世界の有する植物環境デザイニングに関する課題を解決できる「知性」を持つ人材を育成する。

最終的には、修士・博士ともに、未来の経済発展に寄与する人材として育成し定着させることを目標にする。また、本プロジェクトの目標である多様な学位プログラムの未来の担い手として必要な人材も育成する。

（ⅱ）中間評価までの達成目標（事業開始～平成２９年度まで）

中間評価までには、現在進めている DD をもとに、修士課程において SMDD を実現する。この際に未来に JD を設置することを含めた14の共通科目（前出）を実施することで TD も実現する。ここで開設する授業科目の中には、学部の学生を含めた、インテンシブ PBL を実施するため、将来のプログラム候補者の継続的なリクルートと、大学院学生のリーダーシップ・デベロップメントが可能となる。JD については、中間評価までにプログラムの設計を終わらせ、各国の政府機関（教育部など）との最終折衝を実施し、最終年度までの設置を目指す。

育成する人材の数値目標としては、　修士課程＝日本人4名＋中国人6名＋韓国人6名＝14名
博士課程＝日本人2名＋中国人4名＋韓国人4名＝10名

合計24名を年間の目標とする。また、学部の学生を含めたインテンシブ PBL は、年間6回（日本、韓国、中国で各2回（10月、6月））実施し、のべ108名（各回18名（学部12名修士4名博士2名）の参加を予定している。このように、学部のリクルートも含めた、一貫したプログラム運営を構築し実施する。

## ②－１　学生に修得させる具体的能力のうち、一定の外国語力基準をクリアする学生数の推移について

○　本事業計画において海外に留学する日本人学生数のうち、留学後に一定の外国語力基準をクリアする学生数に関する適切な目標が設定されているか。

（ｉ）本事業計画において定める外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

| | 外国語力基準 | 達成目標 | |
|---|---|---|---|
| | | 中間評価まで（事業開始～平成 29 年度まで） | 事業計画全体（事業開始～平成 32 年度まで） |
| | 【参考】本事業計画において海外に留学する日本人学生数 | ５２人 | １５７人 |
| 1 | 本事業に学部で参加するプログラム候補生（学部） | ３２人 | ９８人 |
| 2 | 本事業において学位取得を予定する日本人修士学生 | ６人 | １２人 |
| 3 | 本事業において学位取得を予定する日本人博士学生 | ３人 | ６人 |

（ⅱ）外国語力基準を定めた考え方

（※（ｉ）において、複数の外国語力基準を設けている場合は、それぞれについて明示すること）

千葉大学では、現在入学後に TOEFL によるプレイスメントテストを入学生全員に実施している。平成27年度までは、TOEIC によるプレイスメントテストを実施していたが、現在は留学を推進するために、TOEFL に変更し実施している。本プログラムでは、外部の外国語検定試験の中級クラス＝TOEFL470点以上（他の試験の得点も換算して認める）をプログラムの参加対象としている。千葉大学ではスーパー・グローバル人材育成事業においては、グローバル人材としての外国語力基準を TOEFL510（TOEIC730）点と定めている。その目標数は、平成28年

度までには、学部では 2,400 名、20.9%、大学院では 600 名 15.0%、平成 31 年度までには、学部では 3,600 名 30.8%大学院では 1,600 名 37.2%を目標としており、本プログラムでも、同様の目標設定とする。

（ⅲ）事業計画全体の目標達成に向けたプロセス（事業開始～平成３２年度まで）

（※（ｉ）において、複数の外国語力基準を設けている場合は、それぞれについて明示すること）

千葉大学では、外国語力(英語力)を向上させるために、2つのプログラムを実施している。一つは、外部の BRITISH COUNCIL に委託して実施している授業である「イングリッシュ・コミュニケーション」である。BRITISH COUNCIL ではレベルテストを半年ごとに実施している。この結果は、半期ごとにアマヌエンシスと本人に報告され、レベルの推移を見て授業レベルのアップグレードや授業科目の相談に役立てている。本事業に参加する学生には、この授業の受講を義務づける。もう一方は、イングリッシュ・ハウスにおける、コミュニケーション力向上のプログラムや、TOEIC や TOEFL の集中トレーニングである。本事業参加学生には、同様にこれらのプログラムにも参加し、その成果を逐次アマヌエンシスや SULA に報告するとともに各自がキャリアポートフォリオとして管理することで、目標をクリアする。なお、参加学生に対する全学の水準は、学部学生は TOEIC550点または TOEFL470点を最低条件とし、修士及び博士では TOEIC730点または TOEFL510点とする。授業は全て英語で実施するため、協定大学の学生に対しても日本語能力は求めず、日本人学生と同様の英語力を求める。

（ⅳ）中間評価までの目標達成に向けたプロセス（事業開始～平成２９年度まで）

（※（ｉ）において、複数の外国語力基準を設けている場合は、それぞれについて明示すること）

本事業の対象となる学生は、すでに外部の外国語検定試験のスコアを有している。一方で、プロジェクトの修了時点で、アチーブメントテストを受験することを課しているため、両方のスコアを比較することで外国語力が向上したかをチェックすることができる。アチーブメントテストは、中国・韓国からの帰国時である、7月と1月に実施し、外国語の成果を明らかにする。その際に、30年1月は、29年度の指標である、学部学生 24.2%、大学院学生 22.4% 29年7月は、28年度の指標である、学部学生 20.9%、大学院学生15.0%を目標とする。

## ②－２　学生に修得させる具体的能力のうち、「②－１」以外について

○　本事業に参加する学生に修得させる具体的能力が設定されているか。

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～平成３２年度まで）

本事業では、園芸学と工学の両方に精通し、かつ「文理混合」の知識で、植物環境に関する多様な課題をイノベーションの力で解決できる人材の育成を目標としている。この中の、一つの特色として大学院レベルでの総合科学科目を実施する。この大学院レベルでの教養教育は、これまでグローバル人材育成プログラムとして実施してきた学部での新たな教養教育である「国際日本学」をベースとしている。この総合科学科目は、ワールド・スクールという組織を母体として実施する。これは、本事業で開設されるプログラムなどグローバル関連のプログラムを大学院で実施する際に推進する組織で、平成27年度に構想し、現在実施の準備を行っている。本事業での総合科学科目は、(B)研究＋実践型人材育成プログラム（PBL プログラム）と(D)エクセレント・サマー(ウインター)・プログラムの一部で実施する。また、既に他の世界展開力強化事業で設定されている、グローバル・プロジェクト・リーダー等の6つの授業科目の履修も推奨する。

（ⅱ）中間評価までの達成目標（事業開始～平成２９年度まで）

本年度(平成28年度)より、全学生を対象に国際日本学1単位が必修化された。そこで、本プログラム参加者で、千葉大学在学時に国際日本学を取得していない学生(平成27年入学まで)と他大学から千葉大学の大学院に進学した学生には、プログラム参加の要件として国際日本学の2―6単位を必修化する予定でいる。これは、平成28年度入学のプログラム参加学生より適用し、修了までにこれらの単位を履修することを義務づける。

これらの科目の履修及び単位取得状況については、プログラムに対応する SULA が把握する。

## ③　質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成及び拡大に向けた具体的な取組について

○　質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成及び拡大に向けた具体的な取組が設定されているか。

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～平成３２年度まで）

本プログラムに参加する延世大学、清華大学、浙江大学とは、すでに大学間交流協定と学生交流協定を締結し共同プログラムの準備を進めている。中でもプログラムで実施する共同授業は、この大学間交流の中での新たな取り組みであり、成績なども3大学の連携により採点することで、十分な質の保証を担保する。このように、完全な単位互換のもとに十分な質の保証を伴ったプログラムを実施する。

（ⅱ）中間評価までの達成目標（事業開始～平成２９年度まで）

本プログラムでは、平成28年度には採択後直ちに共同授業の設計を始める。平成29年度には、可能な限り全ての共同授業の科目を履修課程に登録し、正規の授業として実施する。また、参加大学の拡大についても検討する。すでに両国ともトップスクールとの連携になっているが、現在韓国で1校、中国で2校の追加を検討している。韓国はKAIST やPOSTECHなど、中国は南京農業大学、北京林業大学、広州美術学院など戦略的な単科大学との連携を計画している。この単科大学と連携することで、現在の総合大学との連携とはプログラムの内容の差別化をはかり、これまで以上に実践型とする。連携については、事業で連携する延世大学、清華大学、浙江大学と相談しながら決定していく。

## ④　本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移

○　本事業計画において日本人学生の派遣数に関する適切な目標が設定されているか。

| 現状（平成２７年５月１日現在）※１ | （派遣総数）　　３３人 |
|---|---|

（ｉ）日本人学生数の達成目標

| | |
|---|---|
| 事業計画全体の達成目標（事業開始～平成３２年度まで） | １５７人（延べ数） |
| 中間評価までの達成目標（事業開始～平成２９年度まで） | ５２人（延べ数） |

［上記の内訳］

| | 平成 28 年度 | 平成 29 年度 | 平成 30 年度 | 平成 31 年度 | 平成 32 年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合計人数 | ２０人 | ３２人 | ３８人 | ３５人 | ３２人 | １５７人 |

（ⅱ）目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）

千葉大学では現在修士課程13、博士課程14のダブルディグリープログラムが存在する。このプログラムでダブル・ディグリーの取得に至った修了者は、受入は修士11名＋博士11名＝計22名、派遣は修士3名＋博士2名＝計5名となっている。したがって、修了者の比率は、受入:派遣＝4:1となっている。現在の受入は修士1名＋博士5名＝6名、派遣は修士1名＋博士1名＝2名で、受入:派遣＝3:1である。今後、日本人学生の派遣を増やし、最終的には、受入:派遣＝2:1にすることを目標として人数を設定する。

また、平成22年～26年度に採択され実施した「植物環境デザイニングプログラム」では、千葉大学学生79名＋協定校学生69人＝合計148名の学生が参加している。海外からの受入としてのインテンシブ・プログラム((B)研究＋実践型人材育成プログラム（PBL プログラム）や(D)エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム)のみの参加学生は、協定校学生71名であり、すべてのプログラムの参加学生を合計すると、協定校学生140名＋千葉大学学生79名＝219名の学生が参加していた。この実績から見ても受入:派遣＝2:1となっており、上記の目標は達成可能であると考えている。

以上の実績をもとに、本プログラムでは、派遣計画の内訳については、以下表6のように考える。全派遣人数は、157名である。そのうち、DD＋TD 等のプログラムへの参加学生は修士課程において年間4名、事業期間中に18名(28年度2名以後4名)、博士課程において年間2名、プログラム期間中に9名(28年度1名以後2名)を予定している。現在すでに実施しているDDを継続的にするとともに、新たなDD及びJDを中間評価期間以降に設置し、31年度あるいは32年度に学生の募集を開始することを目指す。

また、学部学生を中心として、中国韓国で実施される、エクセレント・サマー(ウインター)・プログラムは年間4回を計画しており、5年間で合計93名の参加を予定している。

表6　派遣先及び派遣人数の参加予定数

| | 清華大学 | 浙江大学 | 延世大学 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| エクセレント・サマープログラム | 31 | 31 | 31 | 93 |
| 修士課程 DD、TD 等(交換留学含む) | 11 | 11 | 27 | 49 |
| 博士課程 DD、TD 等(交換留学含む) | 3 | 3 | 9 | 15 |
| 合　　計 | 45 | 45 | 67 | 157 |

※１　現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における平成２７年５月１日現在の人数を記入すること。

## ⑤　本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移

○　本事業計画において外国人学生の受入数に関する適切な目標が設定されているか。

| 現状（平成２７年５月１日現在）※１ | （受入総数）　　７８７人 |
|---|---|

（ｉ）外国人学生数の達成目標

| | |
|---|---|
| 事業計画全体の達成目標（事業開始～平成３２年度まで） | １５９人（延べ数） |
| 中間評価までの達成目標（事業開始～平成２９年度まで） | ５５人（延べ数） |

［上記の内訳］

| | 平成 28 年度 | 平成 29 年度 | 平成 30 年度 | 平成 31 年度 | 平成 32 年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合計人数 | ２４人 | ３１人 | ３３人 | ３７人 | ３４人 | １５９人 |

（ⅱ）目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）

本プログラムの前身となる「植物環境デザイニングプログラム」および関連プログラムの現在の在籍者は、修士課程4名、博士課程11名である。これらの学生の多くは、この植物環境デザイニングプログラムに関連した優先配置国費特別枠 MADE プログラム（修士課程）および植物環境デザイニングプログラム（博士課程）の学生である。これらの特別枠の奨学金が存在することで、極めて優秀な留学生を獲得できている。これらの実績をもとに、本プログラムではさらなる先鋭化を実施すると同時に、留学生の就職支援についても参加企業と連携して開始する計画である。奨学金による学習支援を確保することが出来れば、受け入れ人数を2倍に増加することも可能であると思われる。これら過去の実績に加えて、平成31 年度～平成32年度の開設を目指して準備を進めている JD も新たな魅力あるプログラムとなりうることから、以下のようにプログラムへの参加予定人数を定めた。

各プログラムや学位毎の受入先および受入人数の合計予定数を表 7 に示す。

受け入れ人数の合計は、159名である。このうち、DD や TD 等の本事業で構築するプログラムへのリクルートの役割を担う、エクセレント・サマー（ウインター）プログラムは、年間2回の実施を考えており、学部学生を中心として合計88名の学生の参加を計画している。一方で、修士課程において49名、博士課程において22名、合計71名を5年間で受け入れる。中間評価期間である平成29年度までは、現在すでに実施している DD を継続的に実施拡大させるとともに、JD の設置準備として3か国4大学の共通科目を開講し、受講する TD や2ターム（3－4か月）の交換留学生や日本人学生の参加状況や成果に基づいて内容の改変を行う。JD 開始については、中間評価期間以降に3か国政府機関と4大学で協議を継続し、了解が得られ次第、学生の募集を開始する計画である。

表7　各プログラムや学位の受入先及び受入人数の参加予定数

| | 清華大学 | 浙江大学 | 延世大学 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| エクセレント・サマープログラム | 26 | 26 | 36 | 88 |
| 修士課程 DD、TD 等（交換留学含む） | 14 | 14 | 21 | 49 |
| 博士課程 DD、TD 等（交換留学含む） | 6 | 6 | 10 | 22 |
| 合　　計 | 46 | 46 | 67 | 159 |

※１　現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における平成２７年５月１日現在の人数を記入すること。

## ⑥ 交流する学生数について

○ 外国人及び日本人学生数の推移については、外国人学生の受入のみに偏らず、相当数の日本人学生の海外派遣を伴う、双方向の
交流活動が発展するような達成目標となっているか。

### １．交流する相手大学名

| （中国側大学） 清華大学、浙江大学 | （韓国側大学） 延世大学 |
|---|---|

### ２．交流する学生数について＜概要＞

（単位：人）

#### ①：本事業計画における交流学生数

| | 平成28年度 | | 平成29年度 | | 平成30年度 | | 平成31年度 | | 平成32年度 | | 合 計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| 合計人数 | 20 | 24 | 32 | 31 | 38 | 33 | 35 | 37 | 32 | 34 | 157 | 159 |

#### ①－１：【三カ国共通の財政支援の有無及び交流相手国別 内訳】

| | | 平成28年度 | | 平成29年度 | | 平成30年度 | | 平成31年度 | | 平成32年度 | | 合 計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| 三カ国共通の財政支援対象となる交流学生数 | | 19 | 19 | 13 | 7 | 24 | 14 | 25 | 23 | 27 | 24 | 108 | 87 |
| | 交流相手国：中国 | 10 | 10 | 7 | 4 | 14 | 8 | 14 | 13 | 15 | 16 | 60 | 51 |
| | 交流相手国：韓国 | 9 | 9 | 6 | 3 | 10 | 6 | 11 | 10 | 12 | 8 | 48 | 36 |
| | 交流相手国：中国及び韓国 | | | | | | | | | | | 0 | |
| 自己負担又は大学負担等による交流学生数 | | 1 | 5 | 19 | 24 | 14 | 19 | 10 | 14 | 5 | 10 | 49 | 72 |

#### ①－２：【交流形態別 内訳】

| | 平成28年度 | | 平成29年度 | | 平成30年度 | | 平成31年度 | | 平成32年度 | | 合 計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流学生数 | 6 | 8 | 14 | 10 | 14 | 10 | 14 | 12 | 14 | 12 | 62 | 52 |
| 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流学生数 | 14 | 16 | 18 | 21 | 24 | 23 | 21 | 25 | 18 | 22 | 95 | 107 |
| 上記以外の交流期間3ヶ月未満の交流学生数 | | | | | | | | | | | 0 | 0 |
| 上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流学生数 | | | | | | | | | | | 0 | 0 |

#### ②：宿舎の提供について

| | 平成28年度 | | 平成29年度 | | 平成30年度 | | 平成31年度 | | 平成32年度 | | 合 計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 宿舎（大学所有の宿舎、大学借り上げによる宿舎等）を提供予定の学生数 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| | 20 | 24 | 32 | 31 | 38 | 33 | 35 | 37 | 32 | 34 | 157 | 159 |

## 3. 交流する学生数について＜派遣・受入別　交流プログラムの詳細＞

### ①:日本人学生の派遣 （日本⇒中国、韓国）

| 年度 | 交流期間 | 派遣元大学名（日） | 派遣先大学名（中、韓） | 交流内容（交流プログラム名等） | 交流形態 | 交流学生数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| H28 | 2016.09 ～ 2017.06 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2016.09 ～ 2016.12 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2017.01 ～ 2017.01 | 千葉大学 | 清華大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 3 |
| | 2016.09 ～ 2017.06 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2016.09 ～ 2016.12 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2017.02 ～ 2017.03 | 千葉大学 | 浙江大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 3 |
| | 2016.09 ～ 2017.02 | 千葉大学 | 延世大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 10 |
| H29 | 2017.09 ～ 2018.06 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2017.09 ～ 2017.12 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2017.06 ～ 2017.07 | 千葉大学 | 清華大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 7 |
| | 2017.09 ～ 2018.06 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2017.09 ～ 2017.12 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2017.06 ～ 2017.07 | 千葉大学 | 浙江大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 7 |
| | 2017.09 ～ 2018.01 | 千葉大学 | 延世大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 6 |
| | 2017.09 ～ 2018.01 | 千葉大学 | 延世大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム<br>交換留学 | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 6 |
| H30 | 2018.09 ～ 2019.06 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2018.09 ～ 2018.12 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2018.06 ～ 2018.07 | 千葉大学 | 清華大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 7 |
| | 2018.09 ～ 2019.06 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2018.09 ～ 2018.12 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2018.06 ～ 2018.07 | 千葉大学 | 浙江大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 7 |
| | 2018.09 ～ 2018.12 | 千葉大学 | 延世大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 6 |
| | 2018.09 ～ 2018.12 | 千葉大学 | 延世大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム<br>交換留学 | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 12 |
| H31 | 2019.09 ～ 2020.06 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2019.09 ～ 2019.12 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2019.06 ～ 2019.07 | 千葉大学 | 清華大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 7 |
| | 2019.09 ～ 2020.06 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2019.09 ～ 2019.12 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2019.06 ～ 2019.07 | 千葉大学 | 浙江大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 7 |
| | 2019.09 ～ 2019.11 | 千葉大学 | 延世大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 8 |
| | 2019.09 ～ 2019.11 | 千葉大学 | 延世大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム<br>交換留学 | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 7 |
| H32 | 2020.09 ～ 2021.06 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2020.09 ～ 2020.12 | 千葉大学 | 清華大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2020.06 ～ 2020.07 | 千葉大学 | 清華大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 7 |
| | 2020.09 ～ 2021.06 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2020.09 ～ 2020.12 | 千葉大学 | 浙江大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2020.06 ～ 2020.07 | 千葉大学 | 浙江大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 7 |
| | 2020.09 ～ 2020.12 | 千葉大学 | 延世大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 6 |
| | 2020.09 ～ 2020.12 | 千葉大学 | 延世大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム<br>交換留学 | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 6 |

（大学名：千葉大学）（タイプ：A－②）

## ②:外国人学生の受入 （中国、韓国⇒日本）

| 年度 | 交流期間 | 派遣元大学名（中、韓） | 受入先大学名（日） | 交流内容（交流プログラム名等） | 交流形態 | 交流学生数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| H28 | 2016.10 ～ 2017.09 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2016.10 ～ 2016.12 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2017.01 ～ 2017.01 | 清華大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 4 |
| | 2016.10 ～ 2017.09 | 浙江大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2016.09 ～ 2016.12 | 浙江大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2017.01 ～ 2017.01 | 浙江大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 4 |
| | 2016.09 ～ 2017.02 | 延世大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 7 |
| | 2016.09 ～ 2017.02 | 延世大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム<br>交換留学 | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 5 |
| H29 | 2017.10 ～ 2018.09 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2017.10 ～ 2017.12 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2017.06 ～ 2017.07 | 清華大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 5 |
| | 2017.10 ～ 2018.09 | 浙江大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2017.10 ～ 2017.12 | 浙江大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2017.06 ～ 2017.07 | 浙江大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 5 |
| | 2017.09 ～ 2017.12 | 延世大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 8 |
| | 2017.09 ～ 2017.12 | 延世大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム<br>交換留学 | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 7 |
| H30 | 2018.10 ～ 2019.09 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2018.10 ～ 2018.12 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 3 |
| | 2018.06 ～ 2018.07 | 清華大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 5 |
| | 2018.10 ～ 2019.09 | 浙江大学 | 千葉大学 | 長期交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 1 |
| | 2018.10 ～ 2019.12 | 浙江大学 | 千葉大学 | 短期交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 3 |
| | 2018.06 ～ 2018.07 | 浙江大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 5 |
| | 2018.09 ～ 2018.12 | 延世大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 8 |
| | 2018.09 ～ 2018.12 | 延世大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム<br>交換留学 | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 7 |
| H31 | 2019.10 ～ 2020.09 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2019.10 ～ 2019.12 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 3 |
| | 2019.06 ～ 2019.07 | 清華大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 6 |
| | 2019.10 ～ 2020.09 | 浙江大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2019.10 ～ 2019.12 | 浙江大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 3 |
| | 2019.06 ～ 2019.07 | 浙江大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 6 |
| | 2019.09 ～ 2019.12 | 延世大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 8 |
| | 2019.09 ～ 2019.12 | 延世大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム<br>交換留学 | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 7 |
| H32 | 2020.10 ～ 2021.09 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2020.10 ～ 2021.12 | 清華大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 4 |
| | 2020.06 ～ 2020.07 | 清華大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 6 |
| | 2020.10 ～ 2021.09 | 浙江大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 2 |
| | 2020.10 ～ 2021.12 | 浙江大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 4 |
| | 2020.06 ～ 2020.07 | 浙江大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流 | 6 |
| | 2020.09 ～ 2020.12 | 延世大学 | 千葉大学 | 交換留学（大学院） | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 5 |
| | 2020.09 ～ 2020.12 | 延世大学 | 千葉大学 | エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム<br>交換留学 | 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | 5 |

（大学名：千葉大学）（タイプ：A－②）

## 大学の世界展開に向けた取組の実績　【国内の大学１校につき、①は２ページ以内、②は１事業ごとに１ページ以内】

| 大学名 | 千葉大学 |
|---|---|

### ① 取組の実績

○　英語による授業の実施や留学生との交流、海外の大学と連携して学位取得を目指す交流プログラムの開発等による国際的な教育環境の構築などに取り組んできた実績を有しているか。
○　海外の有力大学が参加する国際的なネットワークへの参加や、単なる枠組みの形成にとどまらない、実質的な交流が継続して行われてきた実績を有しているか。
○　国際化に対応するため、外国人教員や国際的な教育研究の実績を有する日本人教員の採用や、ＦＤ等による教員の資質向上に取り組んできた実績を有しているか。特に、そのために国際公募、年俸制、テニュアトラック制等を実施・導入しているか。
○　英語のできる国際担当職員の配置、語学等に関する職員の研修プログラムなど、事務体制の国際化に取り組んできた実績を有しているか。
○　厳格な成績管理、学生が履修可能な上限単位数の設定、明確なシラバスの活用等による学修課程と出口管理の厳格化など、単位の実質化に取り組んできた実績を有しているか。

**※大学におけるこれまでの世界展開に向けた取組の実績について、事業との関連性を踏まえつつ上記の点にも言及して具体的に分かりやすく記入するとともに、記入した内容の裏付けとなる資料を様式１１④に貼付してください。**

○国際的な教育環境の構築に関して、本学では博士前期課程学生を対象に3研究科にて、博士後期課程を対象に4研究科にて合計8つの英語による教育プログラムを実施している（様式 11④参照）。また、中国、インドネシア、タイ及びイタリアの4ヶ国16大学との間で27のダブルディグリー・プログラムを実施している（様式11④参照）。
○全学教育の面では、グローバル人材育成の一環として、平成 25 年度より「国際日本学」と呼ばれる科目群を設定し、留学生と協働して学ぶ科目を多数設定したほか、海外の協定校の学生と特定の課題について協働で学ぶ PBL 型の短期プログラム「グローバル・スタディ・プログラム」(GSP)を開始し、マレーシア、フィンランド、ベトナム、ギリシャの協定大学の学生との協働学習を推進するなど、国際的な教育環境の構築に努めている。
【根拠資料】
①英語プログラム一覧
②ダブルディグリー・プログラム一覧
③グローバル・スタディ・プログラム(GSP)実績

○海外有力大学等との国際的ネットワークを通じた交流に関しては、平成 25 年3月、本学を始めとする6大学（千葉大学、新潟大学、金沢大学、岡山大学、長崎大学、熊本大学）は包括協定を締結し、その下で同4月、海外の有力大学連合との交流など国際的活動の連携推進に向け国立六大学国際連携機構 SUN/SixERs を設置した。同機構の立ち上げにより、海外事務所の共用化や岡山大学が実施する文部科学省ミャンマー留学コーディネーター配置事業における連携等、6大学のスケールメリットを活かした様々な海外大学との交流等が行われている。平成 25 年4月には、東南アジアのトップ大学が参加する ASEAN 大学連合（AUN）と同機構が包括協定を締結して、学生の双方向交流やライフサイエンス、社会科学系分野のセミナーの開催などの活動を行っている。平成 27 年 7 月に本学を含む国立六大学は AUN が主導する ASEAN+3 University Network (ASEAN+3 UNet)のメンバー大学として正式加盟している。他方欧州では、平成26年度よりオランダ大学連合(ライデン大学、デフォルト大学、エラスムス大学)及びユトレヒト大学との間で交流に関する協議を行い、平成28年3月にオランダ高等教育国際協力機構(EP-Nuffic)とアライアンス交流に関する包括協定を締結した。今後、具体的な交流についての検討・実施が行われる予定である。
　また、本学はこれまで欧州諸国との学生・研究者交流を促進するため、国内大学とともにコンソーシアムを形成して欧州大学とエラスムスプログラムを実施してきた。今後もこのプログラムを活用した交流を継続・拡大すべく、複数の欧州の大学と調整中である。
　この他、本学は 46 ヶ国 381 の大学間あるいは部局間交流協定を締結しており（平成 28 年3月現在）、学生・研究者交流を非常に活発に行っている。
　本学は海外における展開活動のベースとして、大学としての重点交流展開先のタイ、中国、フィンランド、インドネシア、カナダ、ドイツ、メキシコ、ロシア8カ国・11 大学等に海外拠点を設置している（様式12②参照）。各国に組織されている海外校友会との連携により、留学生リクルート活動、拠点設置先国における大学等との教育研究活動のマッチング、ダブルディグリー等の協働教育プログラム、情報収集・広報活動に活用している。更に、海外拠点設置先でもある中国・上海交通大学との間で共同運営・共同出資による千葉大学・上海交通大学国際共同研究センター（SJTU-CU ICRC）を設置し、本学教授であるセンター長の下、共同研究・産学連携・人材養成のプロジェクト活動を行っている。

○本学は外国人教員の雇用を積極的に進めており、平成 27 年5月1日現在で 70 名の教員（全教員の4%）が在籍している。国際的な教育研究の経験を有する日本人教員については、平成 27 年5月1日現在で 62 名の常勤教員が、海外の大学で学位を取得している（5.5%）。

教員の国際公募については、全学的に統一した制度を導入してはないが、一部の学部・研究科において実施されており、公募情報を英文により学外ホームページに掲載している。また、年俸制については平成 26 年 10 月に全学で導入しており、平成 27 年5月1日現在、16 学部・研究科において 74 名に適用している。今後、平成 28 年度までに、171 名（総教員数の 15%程度）を目標に対象者を広げていく予定である。

テニュアトラック制については、平成 20 年度に生命系科学分野に限定して導入し、平成 22 年度には大学自主取組の制度として全学規程に定め導入した。これまでに 42 名が TT 教員として雇用された。

FD 活動に関しては、全学レベル、部局レベルの双方で様々な分野の FD 活動を活発に実施しており、その中で国際化に関するものは、平成 24 年度4件、平成 25 年度は6件、平成 26 年度は2件、平成27年度は3件実施された（様式 11④参照）。

【根拠資料】

①国際化に対応する FD 実施状況

○事務体制の国際化については、海外の大学との交流、外国人研究者、留学生への対応を担う事務スタッフの質的向上、量的拡大を図ることを目的として、新採用職員全員に対する英語研修、TOEIC の受験促進、学内施設イングリッシュ・ハウスの活用促進、語学学校を活用した語学研修（英語、中国語、韓国語）の他、海外での協定校や海外拠点オフィスの設置大学に短期(10 日間程度)若しくは3ヶ月程度派遣し、派遣先の国際担当部局でのインターンや語学研修を組み合わせた研修プログラムを実施している。これら研修修了者は本部のみならず、各部局の事務部門に多く在籍しており、本事業のバックアップ体制は十分に整っている（実績は様式 11④参照）。

【根拠資料】

①語学研修　受講者数

②海外派遣研修（短期・長期）　受講者数（派遣先別）

○成績管理については、GPA 制度を導入することにより、学生に対するきめ細やかな履修指導、学生自身による学習習熟度の把握等に活用している。また、一部の学部・学科では、合わせて履修可能な上限単位の設定を行い、早期卒業制度を導入している。

シラバスに各回の授業内容、目的・目標、評価方法・基準等を記載し、WEB で公開する等の方法で学生に周知徹底を図ることで、体系的な学習指導に役立てている。また、教育の質を保証するとともに、学生の立場に立った教育課程の体系化を進める仕組みとして、平成 27 年度より「コース・ナンバリング・システム」を全学的に導入した。

これらの他、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを全学単位及び各学部・研究科単位で作成し、教育課程の内容、卒業・終了時の到達目標を設定することで、教育内容の質の確保を行っており、これら 3 つのポリシーは平成 28 年 3 月に中教審から示されたガイドラインをもとにさらに検討して、平成 28 年度中に見直す予定にしている。

| 大学名 | 千葉大学 |
|---|---|

**② 取組の評価**

○　文部科学省の大学教育再生戦略推進費による経費支援を受けて実施し、終了した事業がある場合、事業目的が実現された旨の評価を得ているか。

**※事後評価結果を貼付してください。**

該当なし

## 交流プログラムを実施する相手大学について

【ページ数については、相手大学ごとに①、②合わせて１ページ以内】

交流プログラムを実施する相手大学に関して、
①については、交流プログラムの内容や交流期間など、相手大学との交流実績が分かるように記入してください。
（本事業における交流プログラムとの関連性や現在の交流の有無は問いません。）
なお、交流実績が無い場合は、交流実績が無くとも本事業が実施できると判断した理由及び背景等を説明してください。
②については、相手大学との交流プログラム実施に向けた準備状況について具体的に分かりやすく記入してください。
また、交流を実施するまでの具体的なスケジュールについても記入してください。

| 相手大学名（国名） | 清華大学（中国） |
|---|---|

### ① 交流実績（交流の背景）

○ 交流プログラムを実施する相手大学との交流実績を有しているか。

清華大学とは、平成17年に大学間交流協定を締結し、すでに10年以上の交流実績を有している。大学間交流の最初は、工学研究科は美術学院の連携により始まっている。平成20年には、清華大学のキャンパスにおいて千葉大学と清華大学共催のシンポジウムを開催し、300名以上の参加者を得ている。プログラムの連携については、平成 20 年に園芸学研究科と建築学院が、修士課程でのダブルディグリー・プログラムを締結して実施しており、これまでに7名の学生が終了している(うち2名が日本人学生)。また、工学研究科は美術学院と部局間での交流のもと平成12−13年に社会人教育プログラムとしての連携プログラムを実施している。また、本プログラムの前進となる、植物環境デザイニングプログラムの実施期間中においては、ランドスケープ・ワークショップに建築学院から11名の学生を受け入れている。デザインにおいても、MADE(Master Asia Design Education Program)におけるデザインワークショップにおいても、過去に18名の学生を千葉大学で受け入れている。

清華大学のある、北京には、千葉大学の北京事務所が存在し、1名の職員が在職している。さらには、千葉大学の中国校友会の本部があり、様々な情報交換が可能となっている。中国農業大学や北京林業大学など北京の他の大学の教員や、学長・副学長に就任しているOBも多く在籍しているため、清華大学だけではなく、卒業生のネットワークが形成されている。北京市におけるインターンシップなどはこれらのネットワークを利用し、清華大学とともに構築し、本プログラムで利用していく。

### ② 交流に向けた準備状況

○ 交流プログラムの実施に向けた相手大学との準備（大学ごとの役割・実施体制の明確化など）が十分なされているか。

本プログラムの実施については、3月および4月に連絡し快諾を得ている。現時点で実施している、修士課程の DD を発展させ新たなプログラムを設置することについても前向きに検討することで合意している。さらには、工学系の連携とプログラムの設置についても検討を開始した。現在、美術学院の修士課程のプログラムは3年であり、本プログラムの DD がどのように組み込めるかの検討を始めている。プログラムの多様性に応じて、新しい連携を前提に検討がなされている。

**表9 清華大学のプログラム・パートナー**

| 浙江大学 | | 千葉大学 | |
|---|---|---|---|
| 杨锐(Rui Yang) | 建築学院 教授 | 章俊華<br>高垣美智子 | 園芸学研究科教授<br>副学長(留学・広報担当) |
| 蔡軍 (Jun Sai) | 美術学院 教授 | 渡邉慎二<br>小野健太 | 工学研究科教授<br>工学研究科准教授 |

また、平成28年度の受入予定の学生については、清華大学の建築学院からの学生を1名受け入れ予定である。本年7月には、エクセレント・サマー・プログラムを実施予定で、日本人学生6名を派遣し、PBL ワークショップを開催することも決定している。このよに、すべてのプログラムを着々と実行している状況である。また、現在も4年越しで工学研究科と美術学院との間で DD のプログラムの設置を検討しているが、本プログラムの採択により締結が加速することが期待できる。

**表 10 平成28年度の実施までの今後の予定**

| | 4−5 | 6−7 | 8−9 | 10− |
|---|---|---|---|---|
| プログラム全体 | ▸実施準備 | ▸共同授業設置検討 | ▸清華大学教員招聘 | ▸プログラム開始<br>▸共同授業設置検討 |
| 清華大学からの受入 | | ▸修士・博士入試 | ▸修士・博士入試結果 | ▸修士・博士<br>授業開始 |
| エクセレント・サマー・プログラム | ▸プログラム準備 | ▸プログラム実施 | ▸報告書作成 | |
| その他 | | ▸連携授業実施 | ▸アジア6大学連携WS | |

## 交流プログラムを実施する相手大学について

【ページ数については、相手大学ごとに①、②合わせて１ページ以内】

交流プログラムを実施する相手大学に関して、
①については、交流プログラムの内容や交流期間など、相手大学との交流実績が分かるように記入してください。
（本事業における交流プログラムとの関連性や現在の交流の有無は問いません。）
なお、交流実績が無い場合は、交流実績が無くとも本事業が実施できると判断した理由及び背景等を説明してください。
②については、相手大学との交流プログラム実施に向けた準備状況について具体的に分かりやすく記入してください。
また、交流を実施するまでの具体的なスケジュールについても記入してください。

| 相手大学名（国名） | 浙江大学（中国） |
|---|---|

### ① 交流実績（交流の背景）

○ 交流プログラムを実施する相手大学との交流実績を有しているか。

浙江大学とは、平成23年に大学間交流協定を締結し、5年以上の交流実績を有している。この間平成23年に工学研究科とソフトウエア技術学院、工学研究科と国際デザイン研究院と2つのダブル・ディグリー・プログラムを締結して実施している。また、工学研究科と国際デザイン研究院とは、博士課程の学生の共同育成プログラムも実施している。過去5年間に、修士7名（このうち3名がダブルディグリーの学生）、博士7名を受入ており、現在も博士3名、修士2名が在籍している。また、一ヶ月未満のショートプログラムの学生（学部および修士課程の学生）についても、5年間で30名余りを受け入れている。連携授業は、工学研究科と国際デザイン研究院とで平成24年度より実施しており、これまでに浙江大学の学生約150名、千葉大学の学生30名が参加している。また、浙江大学は平成24年より、シンガポール工科デザイン大学（SUTD）と共同プログラムを実施しているが、千葉大学もこの共同プログラムの一翼を担っており、SUTD の学生が千葉大学と浙江大学が共同で実施しているワークショップにも参加するなど、多様な連携を実現している。

浙江大学には、千葉大学の博士の学位を取得した教員が在籍している。また、浙江大学周辺杭州市の大学には現在4名以上の千葉大学で博士の学位を取得した教員が在籍しており、中国中沿岸部で浙江大学を中心とした卒業生のネットワークが形成されている。浙江省杭州市および寧波市・上海市におけるインターンシップなどはこれらのネットワークを利用し、浙江大学とともに構築し、本プログラムで利用していく。

### ② 交流に向けた準備状況

○ 交流プログラムの実施に向けた相手大学との準備（大学ごとの役割・実施体制の明確化など）が十分なされているか。

平成28年4月に本プログラムにおける打ち合わせを実施した。それまでに、メールによる内容確認と今後の JD などのプログラムへの発展性についても協議し、JD,DD,TD を前向きに設置することで合意した。また、さらに、新たな DD を5月に工学研究科とコンピュータサイエンス技術学院と締結することも合意し、これで3つの DD を設置し、今後の JD,TD に向けた展開に加速をかけることができている。

一方で、国際デザイン研究院は、平成28年より、新たに学部学生の募集を準備しており、これが可能になると、今後は、学部―修士―博士の連携プログラムが可能となる。

**表9 浙江大学のプログラム・パートナー**

| 浙江大学 | | 千葉大学 | |
|---|---|---|---|
| 孫凌雲 （Lingyun Sun） | 国際デザイン研究院長<br>コンピュータサイエンス技術学院 教授 | 渡邉 誠 | 副学長 国際・教育担当<br>工学研究科教授 |
| 黄敬華 （Huang Jinghua） | 准教授 | 小野健太 | 工学研究科 准教授 |

また、平成28年度の受入予定の学生については、浙江大学の修士課程1年生でダブル・ディグリー・プログラムに応募した学生1名、浙江大学の修士課程を本年3月に修了した学生と修士課程に在籍している学生で6月修了予定の学生の合計「修士1名」「博士2名」が入学予定であり、本プログラムの対象となる。また、本年7月にはエクセレント・サマー・プログラムを実施予定で、日本人学生6名を派遣し、PBL ワークショップを開催することも決定している。このように、すべてのプログラムを着々と実行している状況である。

**表 10 平成28年度の実施までの今後の予定**

| | 4―5月 | 6―7月 | 8―9月 | 10月以降 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム全体 | ▸実施準備 | ▸JD 検討開始<br>▸共同授業設置検討 | ▸浙江大学教員招聘 | ▸プログラム開始<br>▸共同授業設置検討 |
| 浙江大学からの受入 | ▸コンピュータサイエンス技術学院 DD 締結 | ▸修士・博士入試 | ▸修士・博士入試結果 | ▸修士・博士<br>授業開始 |
| エクセレント・サマー・プログラム | ▸プログラム準備 | ▸プログラム実施 | ▸報告書作成 | |
| その他 | ▸連携授業実施▸共同研究開始 | ▸連携授業実施 | ▸アジア6大学連携 WS | |

## 交流プログラムを実施する相手大学について

【ページ数については、相手大学ごとに①、②合わせて１ページ以内】

交流プログラムを実施する相手大学に関して、
①については、交流プログラムの内容や交流期間など、相手大学との交流実績が分かるように記入してください。
（本事業における交流プログラムとの関連性や現在の交流の有無は問いません。）
なお、交流実績が無い場合は、交流実績が無くとも本事業が実施できると判断した理由及び背景等を説明してください。
②については、相手大学との交流プログラム実施に向けた準備状況について具体的に分かりやすく記入してください。
また、交流を実施するまでの具体的なスケジュールについても記入してください。

| 相手大学名（国名） | 延世大学（韓国） |
|---|---|

### ① 交流実績（交流の背景）

○ 交流プログラムを実施する相手大学との交流実績を有しているか。

延世大学とは、平成23年に大学間交流協定を締結し、すでに5年の交流実績を有している。特に、人文芸術大学デザイン芸術学部と工学研究科において教育研究での連携が行われてきた。工学研究科と美術大学の連携が本プログラムに直接関与するDD、JD、TDのプログラムの母体となる。本事業の開始を契機として、延世大学の他大学との連携も開始する計画である。

植物環境デザイニングプログラムの実施期間中において、延世大学の学部卒業生2名が千葉大学の修士課程に進学し、2名が交換留学生として千葉大学に在籍した。また、MADE（Master Asia Design Education Program）におけるデザインワークショップにおいても、これまでに18名の学生を千葉大学で受け入れている。延世大学において本プログラムに関連する教員は、日本との連携に極めて積極的であり、今後の連携についての発展が期待できる。

### ② 交流に向けた準備状況

○ 交流プログラムの実施に向けた相手大学との準備（大学ごとの役割・実施体制の明確化など）が十分なされているか。

本プログラムの実施については、3月から4月にかけて複数回にわたり協議を行っている。現時点では、人文芸術大学から、DD、JD、TD のプログラムの設置に向けた協議開始に快諾の連絡を得ている状況である。これまでに、メールによる内容確認と今後の JD などのプログラムへの発展性についての検討を前向きに進めることで合意した。本プログラムにおける共同授業の実施をスタートとして、DD および TD を構築し、将来的に JD へ展開できるようにする。また5月には改めてプログラムの構造について千葉大学に在籍している韓国人教員と打ち合わせを実施し、DD の内容を検討した。

表9　延世大学のプログラム・パートナー

| 延世大学 | | 千葉大学 | |
|---|---|---|---|
| Byungkeun Oh | 人文芸術大学　教授 | 小野健太 | 工学研究科　准教授 |
| Suhong Hwang | 人文芸術大学　教授 | 張益準 | 工学研究科　助教 |

また、平成28年度の受入予定の学生については、延世大学の修士課程の学生1名を、まず交換留学として受け入れることで検討している。また、本年10月に日本で実施予定のエクセレント・ウインター・プログラムに、延世大学生6名を受入れ、PBL ワークショップを開催する予定である。また、本プログラム採択後には、ソウルにおいてエクセレント・ウインター・プログラムを実施することを検討している。このように、事業開始に向けた相談を進めている状況である。

表 10　平成28年度の事業実施開始までの今後の予定

| | 4-5 | 6-7 | 8-9 | 10- |
|---|---|---|---|---|
| プログラム全体 | ▸実施準備 | ▸JD 検討開始<br>▸共同授業設置検討 | ▸共同授業設置検討 | ▸プログラム開始<br>▸延世大学教員招聘 |
| 延世大学からの受入 | | ▸修士・博士入試<br>▸プログラム打合 | ▸修士・博士入試結果<br>▸プログラム打合 | ▸修士・博士<br>授業開始 |
| エクセレント・ウインター・プログラム | | | ▸プログラム準備 | ▸プログラム実施<br>▸報告書作成 |
| その他 | | ▸連携授業検討 | ▸アジア6大学連携WS | ▸エクセレントWS |

**本事業の実施計画**　【①は１ページ以内、②、③は合わせて２ページ以内】

事業全体の「①年度別実施計画」、「②補助期間終了後の事業展開」及び「③補助期間終了後の事業展開に向けた資金計画」について、具体的に分かりやすく記入してください。

## ①　年度別実施計画

**【平成２８年度（申請時の準備状況も記載）】**

平成28年9月までに全学での実施体制の整備を行い、採択後には継続プログラムの実施と、(A)3国間の協定大学との共同プログラムと(B)研究＋実践型人材育成プログラム(PBL プログラム)を重点的に行う。

(1)3協定大学とのプログム全体のグランドデザイン実施(9月ー)
(2)研究＋実践型人材育成プログラム(PBL プログラム)の企業との連携・協議(10月ー)
(3)学内タイムシフト・インターンシップ・プログラムの実施と次世代型の構築(10月ー(秋期以降))
(4)エクセレント・サマー(ウインター)・プログラムの実施と継続のための方法検討(9月、1月)
(5)総合科学科目とワールド・スクールの構造の整備と実施(9月ー)
(6)北京事務所・浙江大学 IEC オフィス・延世大学IEC オフィス3拠点の整備と推進(9月ー)

**【平成２９年度】**

平成29年度(日本4月ー3月、中国9月ー6月、韓国3月ー12月)において、3国間の共同プログラムー共同授業を実施する。平成29年度内に目標の60%、修士課程3科目6単位、博士課程で2科目4単位を実施する。

(1)共同プログラムの部分的な実施(4月ー)
(2)研究＋実践型人材育成プログラム(PBL プログラム)実施(4月ー)
(3)学内タイムシフト・インターンシップ・プログラムの実施　学内インターンシップの充実(4月ー)
(4)エクセレント・サマー(ウインター)・プログラムの実施(9月、1月)
(5)大学院共通の総合科学科目の本格的な実施　ワールド・スクールの実施(4月ー)
(6)延世大学 IEC オフィスの設置、浙江大学 IEC オフィスの機能充実(4月ー)

**【平成３０年度】**

共同プログラムを全て開設して TD の本格的な実施を開始し、JD 開設に向けての交渉を開始する。開始する共同プログラムー共同授業は、修士課程5科目10単位、博士課程で3科目6単位である。

(1)共同プログラムのデジタルアーカイブ作成　継続実施のためのオンライン利用検討(4月ー)
(2)PBL プログラム昨年度のレビューと新たな研究課題に対応する PBL プログラムの設置(4月ー)
(3)学内タイムシフト・インターンシップ・プログラムの実施と次世代型の構築(4月ー)
(4)エクセレント・サマー(ウインター)・プログラムの実施と継続のための方法検討(9月、1月)
(5)ワールド・スクールのプログラムのレビューと新たな大学院共通総合科学科目の開発(4月ー)
(6)北京事務所・浙江大学 IEC オフィス・延世大学 IEC オフィスの3拠点の連携(4月ー)

**【平成３１年度】**

TD の実施。平成31年度または平成32年度に設置し学生を募集する。TD は一般の学生や DD の学生を対象に実施する。これまでのエクセレント・サマー(ウインター)・プログラム参加者から学生を募る。

(1)共同プログラムの全実施　デジタルアーカイブの開放　オンライン化授業開始(4月ー)
(2)PBL プログラム昨年度のレビューと新たな研究課題に対応する PBL プログラムの設置(4月ー)
(3)学外におけるタイムシフト・インターンシップ・プログラムとの連携(4月ー)
(4)エクセレント・サマー(ウインター)・プログラムの継続　(9月、1月)
(5)ワールド・スクールの学内への完全開放　大学院共通総合科学科目の設置(4月ー)
(6)海外3拠点の機能強化(4月ー)

**【平成３２年度】**

自立化のための準備の本格化。プログラム継続のための、連携企業とのプログラム継続のための奨学金などの支援システムの構築。JD の開始。

(1)共同プログラムのオンライン化推進　連携授業のリアルタイムでのビデオ授業の実施(4月ー)
(2)PBL プログラム昨年度のレビューと新たな研究課題に対応する PBL プログラムの設置(4月ー)
(3)インターンシップ・プログラムの継続実施検討　企業との連携強化(4月ー)
(4)エクセレント・サマー(ウインター)・プログラムの継続実施の検討(9月、1月)
(5)ワールド・スクール・プログラムのレビューと国際教養学研究科(平成32年度設置検討)との連携(4月ー)
(6)海外3拠点の機能強化　現地での授業支援など多様な支援の推進(4月ー)

## ② 補助期間終了後の事業展開

本プログラムは、『日中韓等の大学間交流を通じた高度専門職業人育成事業（のちに「大学の世界展開力強化事業「キャンパス・アジア」中核拠点支援に統合」）に平成２２年度に採択された、「植物環境デザイニングプログラム」をベースとして開発している。この成果をもとに、新たに「植物環境イノベーション・プログラム」としての実践型人材の育成を目指している。この事業における4つの目標から、以下のような自立化と事業展開を図る。

(1)６＋4次産業を担う人材のプロフェッショナル化

本プログラムの自立化のためには、企業との連携が必須である。プロフェッショナル人材を育成し、そのプロフェッショナルの一部は、未来の人材を育成する教員となる。このような連鎖を作り上げることによって、持続的なプログラムとしていく。この6＋4次産業は、新なイノベーション人材としても重要な人材であり、プログラムの完成度により、新専攻の設置も視野に入れ新たな産業の担い手を継続的に育成していく。

(2)SMDD（Switch Major Double Degree）の定着

６＋4次産業人材に必要な知識は、多岐に渡っていく。本プログラムでは、工学と園芸学の2つの異なる学位の取得をフラッグシップ・モデル・プログラムとして施行するが、これを他の領域に波及させる。2つの異なる学位として、園芸学＋学術、理学＋工学や工学＋経済学などを学内に定着させ、プログラムの広がりを求める。

(3)トリプル・オプション・ディグリー・プログラムの推進

日本人の学生にとってダブル・ディグリーやジョイント・ディグリーは、未だハードルの高い物であり、付加価値が明確になっていない。本事業では、これらの学位の信頼性を向上させ、ユニークな人材育成であることを広く社会や企業にアピールし、学生にとってメリットのある学位取得プログラムとしていく。また、修学の課程において、期間や学位を変更可能な物にするとともにその内容の質的保証も行うことで、新たな枠組みであるトランスファラブル・ディグリーを定着させ、アジア初のディグリー・プログラムを確立する。

(4)大学院レベルの教養を涵養するワールド・スクールの実施

ワールド・スクールでの総合科学科目は、高度な専門性のある科目＝ナンバリング500番台の科目を全学に開放し実施するものである。これにより、大学院レベルの高度な教養科目を形成していく。本プログラムに限らず、このような研究科横断型の科目を学内で共通科目とすることで、高度な教養科目を形成しグローバルでかつイノベーションに資する知識の獲得を目指していく。将来的には100科目程度の設置を目指していく。

また、プログラム・マネージメントとしては、7つの科目群を以下のように5つに分けて継続的に実施していく。これにより、すべての授業を継続し、自立化を図る。また資金調達が可能なプログラムも一部設置し、事業の恒常化を推進する原動力とする。

●(A)3国間の協定大学との共同プログラム＋(E)ワールド・スクール　総合科学科目群

共同授業の目的は、「①ある特化した専門領域で内容を極める」ものと「②他の領域から俯瞰しあたらしい視点を得る」ものの2種類であると考えている。このうち、①は、研究課題の発掘や国際共同研究への発展を促すものであり、URAと連携し推進していく。もう一方の②は、上記のワールド・スクールの国際教養学科目となり、園芸学や工学に限らず分野を拡大させていく。一部は、MOOCなどのビデオ教材システムやレガシー・コンテンツ化を行い広く海外に発信することで、優秀な学生をリクルートする。

●(B)研究＋実践型人材育成プログラム(PBL プログラム)

自立化後も、「大学―海外協定大学―企業」の連携による実践型人材育成プログラムを継続的に実施する。事業運営期間に発見された3研究を、研究課題持ち込み型の PBL に発展させ、企業のスポンサーのもと実施する。さらには、その成果をベンチャーとして起業することも視野に入れプログラムを推進する。

●(C)タイムシフト・インターンシップ・プログラム

タイムシフト・インターンシップは、有効な時間の利用が可能なものであるため、今後全学に波及させる。なかでも、西千葉および柏の葉のキャンパスにおける、学内タイムシフト・インターンシップを拡充し、キャンパスにいながらにしてインターンシップを体験出来る機会を拡充する。

●(D)エクセレント・サマー(ウインター)・プログラム

自立化後も、未来のプログラムの候補者を獲得するために継続する。また、中韓だけではなく、世界に広めることで、千葉大学独自のプログラムを広報する。自立化後は、博士の学生をアシスタントとして雇用し、プログラムをオーガナイズする。また、参加費用についても有償化し、独自の運営が可能なものとしていく。

●(F)通常プログラム＋(G)協定校プログラム(10単位～)

協定校において実施する授業は、全て単位として認定するシステムを構築する。これらは、単位互換だけではなく、どのような授業を学んできたかをわかるようにするための意図があり、平成28年度より導入されたデジタルポートフォリオに連動するようなシステムとして構築する。

以上のように、教育改革に沿ってプログラムを持続的に運営出来るようにする。

## ③ 補助期間終了後の事業展開に向けた資金計画

補助期間終了後の自立化の資金としては、大きく4つに分類し推進する。これらは、1.大学独自の支援で主に寄付金より捻出するもの、2.企業などからの受託研究・受託事業・奨学寄付金など外部資金によるもの、3.参加学生の自己負担金、4.その他各種奨学金など、である。これらの資金の事業全体に対する比率は、**1.大学:2.企業:3.学生:4.その他＝30:40:20:10**で運営していく。詳細については以下の通りである。

■□1.大学独自の支援

大学からの資金としては、下記のように1−1～3まで大きく3つある。このうち、1−1と1−2は受け入れに関する支援であり、1−3は派遣に関する支援である。

1−1.エクセレント・スチューデント・スカラーシップ ＜受入＞入学前に授業料免除と奨学金を付与する。学内のプログラム毎に登録し、その中から学生を選抜する。本プログラムは、すでに前進の植物環境デザイニングプログラムが登録されており、本プログラムも登録し、本スカラーシップの対象とする。

1−2.パートナーシップ・プログラム ＜受入＞入学前に授業料免除とする。上記と同様の登録制度であり、本プログラムも対象となっている。

1−3.留学奨学金 ＜派遣＞短期（2週間程度）のものから1年まで複数の奨学金が存在する。なかでも交換留学に向けた奨学金を平成28年度に人数を追加して設定した。これらの奨学金をプログラムの参加学生に付与する。また、プログラム専用の奨学金をこれらとは別に準備する。

■2.企業などからの外部資金の導入

2−1.PBL プログラム

PBL プログラムに関わる経費は、専門家の招聘費用、実験装置等の消耗品費用、学生の移動に関わる費用、報告書等の印刷・ビデオ制作に関する費用の4つから成り立っている。費用の総計は、プロジェクトの内容にもよるが概ね1，000～3，000千円程度である。これらの費用について、スポンサー企業を設け共同研究経費として提供してもらう。

2−2.インターンシップ支援

学生のモビリティ向上には、奨学金や交通費等の資金援助が必要である。そこで、補助期間終了後は、企業でインターンシップを行うのに合わせて来日したり渡航したりすることで、企業が交通費及び滞在費を負担し、学生のモビリティを維持する。インターンシップ予定の学生の1／4程度を優先産学連携インターンシップとして採択し補助する。

2−3.寄付講座など

事業期間内に得た成果をもとに大学独自の事業展開を行う。そのため、これに対する収益としては、寄附講座として大学に寄贈してもらい、それを継続する。寄附講座は、主に博士の学生を専門研究員として雇用し、継続的な雇用を実現する。このように、寄付講座の予算で研究留学を実現する。

2−4.企業コンソーシアムとの連携

現在柏の葉キャンパスにはNPO 植物工場研究会と植物工場拠点に関わる企業コンソーシアムがある。これらの企業コンソーシアムと連携し資金提供を受けながら実践的プログラムを実施する。

■3.参加学生の自己負担金

3−1.留学における自己負担

本事業においては、事業期間中においても学生の自己負担を義務化する。分担率は受入・派遣それぞれの期間によるが、概ね20％程度を目標とする。自立化後にはその自己負担金の比率を30～40％に引き上げ各自に負担してもらう。

3−2. エクセレント・サマー（ウインター）・プログラム

千葉大学では、現在サマー（ウインター）・プログラムの一部を有償で実施している。参加費用は120，000円程度である。この参加費用を参考に、本事業のエクセレント・サマー（ウインター）・プログラムについての有償化金額を決定する。現時点では、概ね半分程度60，000円前後の金額を検討している。

■4.その他各種奨学金など

JASSO の奨学金や各種民間の奨学金を活用し、留学生の受入・派遣を推進する。また、民間の奨学金なども活用する。日本人の学生の派遣には、中国の大学の奨学金を活用していく。これらの奨学金情報の一元管理も現在全学で整備中であり、これらを活用していく。

以上のように、「**1.大学＋2.企業＋3.学生＋4.その他」で連携して自立化をする。**なかでも、企業との連携は、プログラム連携、インターンシップ連携から企業コンソーシアムとの連携に至る多様な連携のもと展開する。

様式9

## 補助期間における各経費の明細【年度ごとに1ページ】

○ 資金計画が、経費や規模の面で合理的であるか。

（単位：千円）

補助金申請ができる経費は、当該事業の遂行に必要な経費であり、本プログラムの目的である大学の世界展開力強化のための使途に限定されます。（平成28年度大学の世界展開力強化事業公募要領参照。）
【年度ごとに1ページ】

記載例 ：教材印刷費　○○○千円
○○部×@○○○円
：謝金　○○○千円
○○人×@○○○円

| ＜平成28年度＞　経費区分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| [物品費] | 3,420 | 0 | 3,420 | |
| ①設備備品費 | 2,500 | 0 | 2,500 | |
| ・プロジェクトモデル製作用3Dプリンター | 1,000 | | 1,000 | |
| ・AR用ヘッドマウントディスプレイシステム | 1,500 | | 1,500 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②消耗品費 | 920 | 0 | 920 | |
| ・３Dプリンター材料 | 600 | | 600 | |
| ・モデル材料 | 320 | | 320 | |
| [人件費・謝金] | 7,080 | 3,000 | 10,080 | |
| ①人件費 | 6,300 | 3,000 | 9,300 | |
| ・特別研究員 @400,000×2人×6月 | 4,800 | | 4,800 | |
| ・留学コーディネーター　@250,000×1人×6月 | 1,500 | | 1,500 | |
| ・技術補佐員@250,000×2人×6月 | | 3,000 | 3,000 | |
| ②謝金 | 780 | 0 | 780 | |
| ・講演謝金　@6,500*20h*6名 | 780 | | 780 | |
| | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| [旅費] | 2,900 | 0 | 2,900 | |
| ・中国・韓国３拠点校打合 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・ワークショップ教員派遣 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・ワークショップ教員受入 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・国内企業インターンシップ打合旅費 | 200 | | 200 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| [その他] | 6,600 | 0 | 6,600 | |
| ①外注費 | 1,500 | 0 | 1,500 | |
| ・ホームページ作成 | 1,000 | | 1,000 | |
| ・プロジェクトビデオ制作 | 500 | | 500 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②印刷製本費 | 300 | 0 | 300 | |
| ・プロジェクト中間報告レポート印刷 | 300 | | 300 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ③会議費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ④通信運搬費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑤光熱水料 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑥その他（諸経費） | 4,800 | 0 | 4,800 | |
| ・学生派遣支援　@100,000*24人 | 2,400 | | 2,400 | |
| ・学生受入支援　@100,000*24人 | 2,400 | | 2,400 | |
| ・ | | | 0 | |
| 平成28年度　合計 | 20,000 | 3,000 | 23,000 | |

（大学名：千葉大学）（タイプ：A－②）

様式9

（前ページの続き）　　（単位：千円）

| ＜平成29年度＞　経　費　区　分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| ［物品費］ | 7,620 | 0 | 7,620 | |
| ①設備備品費 | 4,400 | 0 | 4,400 | |
| ・IECオフィステレビ会議システム@800,000×3 | 2,400 | | 2,400 | |
| ・垂直緑化シミュレーション設備 | 2,000 | | 2,000 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②消耗品費 | 3,220 | 0 | 3,220 | |
| ・３Dプリンター材料 | 1,600 | | 1,600 | |
| ・モデル材料 | 1,620 | | 1,620 | |
| ・ | | | 0 | |
| ［人件費・謝金］ | 20,160 | 3,000 | 23,160 | |
| ①人件費 | 16,200 | 3,000 | 19,200 | |
| ・特別研究員 @400,000×2人×12月 | 9,600 | | 9,600 | |
| ・留学コーディネーター　@250,000×1人×12月 | 3,000 | | 3,000 | |
| ・IECオフィス雇用 @100,000×3人×12月 | 3,600 | | 3,600 | |
| ・技術補佐員@250,000×1人×12月 | | 3,000 | 3,000 | |
| ②謝金 | 3,960 | 0 | 3,960 | |
| ・講演謝金　@6,500*40h*6名 | 1,560 | | 1,560 | |
| ・連携大学教員謝金 @400,000×3人×２月 | 2,400 | | 2,400 | |
| ・ | | | 0 | |
| ［旅費］ | 2,900 | 0 | 2,900 | |
| ・中国・韓国３拠点校打合 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・ワークショップ教員派遣 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・ワークショップ教員受入 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・国内企業インターンシップ打合旅費 | 200 | | 200 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ［その他］ | 9,320 | 0 | 9,320 | |
| ①外注費 | 2,000 | 0 | 2,000 | |
| ・ホームページ作成 | 1,000 | | 1,000 | |
| ・プロジェクトビデオ制作 | 1,000 | | 1,000 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②印刷製本費 | 600 | 0 | 600 | |
| ・プロジェクト中間報告レポート印刷 | 600 | | 600 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ③会議費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ④通信運搬費 | 720 | 0 | 720 | |
| ・IECオフィス通信費 @20,000×3拠点×12月 | 720 | | 720 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑤光熱水料 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑥その他（諸経費） | 6,000 | 0 | 6,000 | |
| ・学生派遣支援　@100,000*30人 | 3,000 | | 3,000 | |
| ・学生受入支援　@100,000*30人 | 3,000 | | 3,000 | |
| ・ | | | 0 | |
| 平成29年度　合計 | 40,000 | 3,000 | 43,000 | |

（大学名：千葉大学）（タイプ：A－②）

様式9

（前ページの続き）　　（単位：千円）

| ＜平成30年度＞　経　費　区　分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| [物品費] | 4,420 | 0 | 4,420 | |
| ①設備備品費 | 2,000 | 0 | 2,000 | |
| ・垂直緑化シミュレーション設備追加 | 2,000 | | 2,000 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②消耗品費 | 2,420 | 0 | 2,420 | |
| ・３Dプリンター材料 | 1,200 | | 1,200 | |
| ・モデル材料 | 1,220 | | 1,220 | |
| ・ | | | 0 | |
| [人件費・謝金] | 20,160 | 3,000 | 23,160 | |
| ①人件費 | 16,200 | 3,000 | 19,200 | |
| ・特別研究員 @400,000×2人×12月 | 9,600 | | 9,600 | |
| ・留学コーディネーター　@250,000×1人×12月 | 3,000 | | 3,000 | |
| ・IECオフィス雇用 @100,000×3人×12月 | 3,600 | | 3,600 | |
| ・技術補佐員@250,000×1人×12月 | | 3,000 | 3,000 | |
| ②謝金 | 3,960 | 0 | 3,960 | |
| ・講演謝金　@6,500*40h*6名 | 1,560 | | 1,560 | |
| ・連携大学教員謝金 @400,000×3人×２月 | 2,400 | | 2,400 | |
| ・ | | | 0 | |
| [旅費] | 2,900 | 0 | 2,900 | |
| ・中国・韓国３拠点校打合 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・ワークショップ教員派遣 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・ワークショップ教員受入 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・国内企業インターンシップ打合旅費 | 200 | | 200 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| [その他] | 8,520 | 0 | 8,520 | |
| ①外注費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②印刷製本費 | 600 | 0 | 600 | |
| ・プロジェクト中間報告レポート印刷 | 600 | | 600 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ③会議費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ④通信運搬費 | 720 | 0 | 720 | |
| ・IECオフィス通信費 @20,000×3拠点×12月 | 720 | | 720 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑤光熱水料 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑥その他（諸経費） | 7,200 | 0 | 7,200 | |
| ・学生派遣支援　@100,000*36人 | 3,600 | | 3,600 | |
| ・学生受入支援　@100,000*36人 | 3,600 | | 3,600 | |
| ・ | | | 0 | |
| 平成30年度　合計 | 36,000 | 3,000 | 39,000 | |

（大学名：千葉大学）（タイプ：A－②）

様式9

（前ページの続き）　　（単位：千円）

| ＜平成31年度＞　経　費　区　分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| ［物品費］ | 1,900 | 0 | 1,900 | |
| ①設備備品費 | 1,000 | 0 | 1,000 | |
| ・屋上緑化実験設備 | 1,000 | | 1,000 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②消耗品費 | 900 | 0 | 900 | |
| ・３Dプリンター材料 | 500 | | 500 | |
| ・モデル材料 | 400 | | 400 | |
| ・ | | | 0 | |
| ［人件費・謝金］ | 20,160 | 3,000 | 23,160 | |
| ①人件費 | 16,200 | 3,000 | 19,200 | |
| ・特別研究員 @400,000×2人×12月 | 9,600 | | 9,600 | |
| ・留学コーディネーター　@250,000×1人×12月 | 3,000 | | 3,000 | |
| ・IECオフィス雇用 @100,000×3人×12月 | 3,600 | | 3,600 | |
| ・技術補佐員@250,000×1人×12月 | | 3,000 | 3,000 | |
| ②謝金 | 3,960 | 0 | 3,960 | |
| ・講演謝金　@6,500*40h*6名 | 1,560 | | 1,560 | |
| ・連携大学教員謝金 @400,000×3人×２月 | 2,400 | | 2,400 | |
| ・ | | | 0 | |
| ［旅費］ | 2,900 | 0 | 2,900 | |
| ・中国・韓国３拠点校打合 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・ワークショップ教員派遣 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・ワークショップ教員受入 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・国内企業インターンシップ打合旅費 | 200 | | 200 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ［その他］ | 7,440 | 0 | 7,440 | |
| ①外注費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②印刷製本費 | 0 | 0 | 0 | |
| | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ③会議費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ④通信運搬費 | 720 | 0 | 720 | |
| ・IECオフィス通信費 @20,000×3拠点×12月 | 720 | | 720 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑤光熱水料 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑥その他（諸経費） | 6,720 | 0 | 6,720 | |
| ・学生派遣支援　@80,000*42人 | 3,360 | | 3,360 | |
| ・学生受入支援　@80,000*42人 | 3,360 | | 3,360 | |
| ・ | | | 0 | |
| 平成31年度　合計 | 32,400 | 3,000 | 35,400 | |

（大学名：千葉大学）（タイプ：Ａ－②）

様式9

（前ページの続き）　　（単位：千円）

| ＜平成32年度＞　経　費　区　分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| [物品費] | 520 | 0 | 520 | |
| ①設備備品費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②消耗品費 | 520 | 0 | 520 | |
| ・３Dプリンター材料 | 520 | | 520 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| [人件費・謝金] | 20,160 | 3,000 | 23,160 | |
| ①人件費 | 16,200 | 3,000 | 19,200 | |
| ・特別研究員 @400,000×2人×12月 | 9,600 | | 9,600 | |
| ・留学コーディネーター　@250,000×1人×12月 | 3,000 | | 3,000 | |
| ・IECオフィス雇用 @100,000×3人×12月 | 3,600 | | 3,600 | |
| ・技術補佐員@250,000×1人×12月 | | 3,000 | 3,000 | |
| ②謝金 | 3,960 | 0 | 3,960 | |
| ・講演謝金　@6,500*40h*6名 | 1,560 | | 1,560 | |
| ・連携大学教員謝金 @400,000×3人×２月 | 2,400 | | 2,400 | |
| ・ | | | 0 | |
| [旅費] | 2,000 | 0 | 2,000 | |
| ・ワークショップ教員派遣 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・ワークショップ教員受入 @150,000*6名 | 900 | | 900 | |
| ・国内企業インターンシップ打合旅費 | 200 | | 200 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| [その他] | 6,480 | 0 | 6,480 | |
| ①外注費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ②印刷製本費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ③会議費 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ④通信運搬費 | 720 | 0 | 720 | |
| ・IECオフィス通信費 @20,000×3拠点×12月 | 720 | | 720 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑤光熱水料 | 0 | 0 | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ・ | | | 0 | |
| ⑥その他（諸経費） | 5,760 | 0 | 5,760 | |
| ・学生派遣支援　@60,000*48人 | 2,880 | | 2,880 | |
| ・学生受入支援　@60,000*48人 | 2,880 | | 2,880 | |
| ・ | | | 0 | |
| 平成32年度　合計 | 29,160 | 3,000 | 32,160 | |

（大学名：千葉大学）（タイプ：Ａ－②）

## 交流プログラムを実施する相手大学の概要 【相手大学数に応じたページ数(枠内に記入)】

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大学名称 | 清華大学<br>Tsinghua University | | 国名 | 中国 | |
| 設置形態 | 国立 | 設置年 | 1911年 | | |
| 設置者(学長等) | 邱勇 (Qo yong) | | | | |
| 学部等の構成 | 土木水利学院<br>機械工程学院<br>航天航空学院<br>音信科学技術学院<br>理学院<br>生命科学学院<br>電気工程応用電子技術系<br>環境科学と工程系<br>材料科学と工程系<br>工程物理系<br>化学工程系<br>交差音信研究院<br>理学院 | 経済管理学院<br>公共管理学院<br>マルクス主義学院<br>人文社会科学学院<br>法学院<br>新聞と情報学院<br>美術学院<br>医学院<br>原子力と新エネルギー技術研究院<br>体育部<br>芸術教育センター<br>深圳研究生院<br>継続教育学院 | | | |
| 学生数 | 総数 | 40,796人 | 学部生数 | 15,636人 | 大学院生数 25,160人 |
| 受け入れている留学生数 | 3,380人 | 日本からの留学生数 | 156人 | | |
| 海外への派遣学生数 | 5,845人 | 日本への派遣学生数 | 大学で把握している情報なし | | |
| Webサイト(URL) | http://www.tsinghua.edu.cn/publish/newthuen/index.html | | | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大学名称 | 浙江大学<br>Zhejiang University | | 国名 | 中国 | |
| 設置形態 | 国立 | 設置年 | 1897年 | | |
| 設置者(学長等) | 吴朝晖 (Wu Zhaohui) | | | | |
| 学部等の構成 | 経済学院<br>教育学院<br>外国語言文化と国際交流学院<br>人文学院<br>光華法学院<br>理学院<br>生命科学学院<br>機械と能源工程学院<br>材料と科学工程学院<br>電気工程学院<br>信息科学と工程学院<br>公共管理学院<br>電播と国際文化学院<br>計算機科学と技術学院<br>建築工程学院 | 生物系等工程と食品化学学院<br>環境と資源学院<br>生物医学工程と機器科学学院<br>農業と生物技術学院<br>動物科学学院<br>医学院<br>薬学院<br>管理学院<br>軟件学院<br>竺可楨学院<br>航空航天学院 | | | |
| 学生数 | 総数 | 47,339人 | 学部生数 | 23,897人 | 大学院生数 23,442人 |
| 受け入れている留学生数 | 5849人 | 日本からの留学生数 | 大学で把握している情報なし | | |
| 海外への派遣学生数 | 4156人 | 日本への派遣学生数 | 大学で把握している情報なし | | |
| Webサイト(URL) | http://www.zju.edu.cn/english/ | | | | |

(大学名:千葉大学)(タイプ:A−②)

## 交流プログラムを実施する相手大学の概要 【相手大学数に応じたページ数（枠内に記入）】

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大学名称 | 延世大学<br>Yonsei University | 国名 | 韓国 |
| 設置形態 | 私立 | 設置年 | 1885年 |
| 設置者（学長等） | H. G. Underwood | | |
| 学部等の構成 | 文科大学国語国文学<br>英語英文学<br>中国語中国文学<br>ドイツ語ドイツ文学<br>フランス語フランス文学<br>ロシア語ロシア文学<br>史学<br>哲学<br>心理学<br>文献情報学<br>商経大学経済学科<br>応用統計学科<br>経営大学経営学科<br>法科大学法学科<br>社会科学大学政治外交学科<br>行政学科<br>言論広報映像学部<br>社会学科<br>社会福祉学科<br>教育科学大学教育学科<br>体育教育学科<br>社会体育学科<br>音楽大学教会音楽科<br>声楽科<br>器楽科<br>作曲科<br>神科大学神学科<br>理科大学数学科<br>物理学科<br>化学科<br>地球システム科学科<br>天文宇宙学科<br>大気科学科<br>工科大学化工生命工学科<br>電気電子工学科<br>建築工学科<br>都市工学科<br>土木・環境工学科<br>機械工学科<br>新素材工学科<br>情報産業工学科<br>コンピューター科学科<br>グローバル融合工学部<br>生命システム大学生物学科<br>生化学科<br>生命工学科<br>生活科学大学衣類環境学科<br>食品栄養学科<br>住居環境学科<br>児童家庭学科<br>生活デザイン学科<br>医科大学医学科<br>歯科大学歯医学科<br>看護大学看護学科<br>アンダーウッド国際大学アンダーウッド学部<br>アジア学部<br>テクノアート学部<br>融合人文社会学部<br>融合科学工学学部 | | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学生数 | 総数 | 37,742人 | 学部生数 | 26,103人 | 大学院生数 | 11,639人 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 受け入れている留学生数 | 4,538人 | 日本からの留学生数 | 358人 |
| 海外への派遣学生数 | 79人※ | 日本への派遣学生数 | 3人※ |
| Ｗｅｂサイト（ＵＲＬ） | http://www.yonsei.ac.kr/en_sc/ | | |

※ ウォンジュキャンパスのみ

（大学名：千葉大学）（タイプ：Ａ－②）

**参考データ【国内の大学等1校につき、①～③は枠内に記入、④及び⑤はそれぞれ2ページ以内】**
**※人数等の算定に当たっては、原則として「学校基本調査」による定義に基づいて記入してください。**

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

## ①大学等全体における出身国別の留学生の受入総数（平成27年5月1日現在）及び各出身国（地域）別の平成27年度の留学生受入人数

※ここでの「留学生」とは、「出入国管理及び難民認定法」別表1に定める「留学」の在留資格を有する者に限ります。
※平成27年度の留学生受入人数は、平成27年4月1日～平成28年3月31日の出身国（地域）別受入人数を記入してください。
※ここでの「全学生数」とは、日本人学生及び外国人留学生を含めた大学等全体の平成27年5月1日現在の在籍者数を記入してください。

| 順位 | 出身国（地域） | | 受入総数 | 平成27年度受入人数 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 中国 | | 417 | 536 |
| 2 | 韓国 | | 93 | 104 |
| 3 | インドネシア | | 58 | 70 |
| 4 | タイ | | 26 | 47 |
| 5 | 台湾 | | 23 | 38 |
| 6 | マレーシア | | 22 | 24 |
| 7 | ベトナム | | 16 | 18 |
| 8 | ドイツ | | 11 | 24 |
| 8 | モンゴル | | 11 | 13 |
| 10 | バングラデシュ | | 8 | 8 |
| その他（上記10カ国以外） | （主な国名） | フィンランド，アメリカ，トルコ，イラン，フランス，メキシコ，ロシア等 | 102 | 156 |
| 留学生の受入人数の合計 | | | 787 | 1038 |
| 全学生数 | | | 14779 | |
| 留学生比率 | | | 5.3% | |

## ②平成27年度中に留学した日本人学生数及び派遣先大学合計校数

※教育又は研究等を目的として、平成27年度中（平成27年4月1日から平成28年3月31日まで）に海外の大学等（海外に所在する日本の大学等の分校は除く。）に留学した日本人学生について記入してください。
なお、平成27年3月31日以前から継続して留学している者は含みません。

| 順位 | 派遣先大学の所在国（地域） | 派遣先大学名 | 平成27年度派遣人数 |
|---|---|---|---|
| 1 | タイ | マヒドン大学 | 76 |
| 2 | アメリカ | アラバマ大学タスカルーサ | 38 |
| 2 | インドネシア | インドネシア大学 | 38 |
| 4 | 台湾 | 国立台湾大学 | 37 |
| 5 | オーストラリア | モナシュ大学 | 32 |
| 6 | カナダ | アルバータ大学 | 26 |
| 7 | タイ | チュラロンコーン大学 | 25 |
| 7 | インドネシア | バンドン工科大学 | 25 |
| 9 | インドネシア | ガジャマダ大学 | 21 |
| 10 | 韓国 | ソウル国立大学 | 20 |
| その他（上記10校以外） | （主な国名） タイ，英国，メキシコ，ベトナム，ドイツ，中国等 | （主な大学名） キングモンクット工科大学トンブリ校，ボーンマス美術大学等 | 458 |
| | 計 33 カ国 | 計 124 校 | |
| 派遣先大学合計校数 | | 134 | |
| 派遣人数の合計 | | | 796 |

（大学名：千葉大学）（タイプ：A－②）

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

**③大学等全体における外国人教員数（兼務者を含む）（平成２７年５月１日現在）**

※「全教員数」には大学等に在籍する日本人教員も含めた全教員数を記入してください。

※「うち専任教員（本務者）数」には教授、准教授、講師、助教、助手の専任の外国人教員の数をそれぞれ記入してください。（いずれにも当てはまらない場合には、「助手」に含めてください。）

| 全教員数 | 外国人教員数 | | | | | | 外国人教員の比率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 教授 | 准教授 | 講師 | 助教 | 助手 | 合計 | |
| 1,322 | 10 | 7 | 44 | 9 | 0 | 70 | 5.3% |
| うち専任教員（本務者）数 | 10 | 7 | 1 | 9 | 0 | 27 | |

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

**④「様式6①取組の実績」で記入した実績を示すデータや資料等をとりまとめ、出典を付して記入又は貼付してください。【2ページ以内】**

## ○ 英語プログラム一覧

| 研究科等 | 課程 | プログラム名 | 開始年度 |
|---|---|---|---|
| 園芸学研究科 | 博士前期課程 | アジア環境園芸学エキスパートプログラム | 21年度 |
| 融合科学研究科 | 博士前期課程 | ナノ・イメージング国際融合プログラム | 21年度 |
| 看護学研究科 | 博士前期課程 | 国際プログラム | 24年度 |
| 工学研究科 | 博士前期課程 | MADEプログラム（Master of Asia Design Education Program） | 25年度 |
| 園芸学研究科 | 博士後期課程 | 環境園芸学国際プログラム | 20年度 |
| 融合科学研究科 | 博士後期課程 | 先進国際プログラム | 21年度 |
| 看護学研究科 | 博士後期課程 | 国際プログラム | 26年度 |
| 医学薬学府 | 4年博士課程 | 先進医学薬学国際プログラム | 23年度 |

## ○ ダブルディグリー・プログラム一覧

| 国名 | No. | 相手先大学名・部局名 | 千葉大学部局名 | 研究分野 | 学位 | | 協定締結年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 修士 | 博士 | |
| 中国 | 1 | 清華大学<br>建築学院 | 園芸学研究科 | 園芸学 | ○ | | 2008 |
| | 2 | 上海交通大学<br>媒体設計学院<br>（メディアデザイン学部） | 工学研究科<br>デザイン科学専攻 | デザイン | ○ | | 2009 |
| | 3 | 上海交通大学研究生院<br>船舶海洋建築工学院、生物医学工程学院、<br>電子情報電気工程学院 | 工学研究科<br>人工システム科学専攻 | ロボティクス | | ○ | 2009 |
| | 4 | 上海交通大学農業生物学院 | 園芸学研究科 | 園芸学 | ○ | ○ | 2011 |
| | 5 | 浙江大学<br>コンピューター学院 | 工学研究科 | デザイン | ○ | | 2011 |
| | 6 | 浙江大学<br>国際デザイン学院 | 工学研究科 | デザイン | ○ | | 2011 |
| | 7 | 電子科技大学<br>電子工学部 | 工学研究科 | 電子工学 | | ○ | 2014 |
| | 8 | 南京農業大学 | 園芸学研究科 | 園芸学 | ○ | | 2015 |
| インドネシア | 9 | ボゴール農科大学<br>農学部 | 園芸学研究科 | 園芸学 | ○ | | 2010 |
| | 10 | インドネシア大学<br>工学部、理学部 | 工学研究科、融合科学研究科、<br>環境ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ研究ｾﾝﾀｰ | 医工学<br>ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ | ○ | ○ | 2012 |
| | 11 | ウダヤナ大学<br>大学院プログラム | 融合科学研究科、<br>環境ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ研究ｾﾝﾀｰ | ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ | ○ | ○ | 2012 |
| | 12 | ガジャマダ大学<br>地理学部 | 融合科学研究科、<br>環境ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ研究ｾﾝﾀｰ | ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ | ○ | ○ | 2012 |
| | 13 | ハサヌディン大学<br>理学部、環境研究ｾﾝﾀｰ | 融合科学研究科、<br>環境ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ研究ｾﾝﾀｰ | ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ | ○ | ○ | 2012 |
| | 14 | バンドン工科大学<br>デザイン学部、地球工学部、生命工学部 | 工学研究科、融合科学研究科、<br>環境ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ研究ｾﾝﾀｰ | デザイン<br>ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ | ○ | ○ | 2012 |
| | 15 | パジャジャラン大学<br>理学部、農学部、農業工学部、環境学部 | 園芸学研究科、環境健康ﾌｨｰﾙﾄﾞ科学ｾﾝﾀｰ、<br>融合科学研究科、環境ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ研究ｾﾝﾀｰ | 園芸学<br>ﾘﾓｰﾄｾﾝｼﾝｸﾞ | ○ | ○ | 2012 |
| タイ | 16 | マヒドン大学<br>理学部、大学院 | 園芸学研究科 | 園芸学 | | ○ | 2008 |
| | 17 | シルパコーン大学<br>薬学部 | 薬学研究院、医学薬学府 | 天然物化学 | | ○ | 2012 |
| | 18 | キングモンクット工科大学 | 園芸学研究科 | 園芸学 | | ○ | 2014 |
| | 19 | マヒドン大学<br>薬学部 | 医学薬学府（薬学領域） | 薬学 | | ○ | 2014 |
| ｲﾀﾘｱ | 20 | フィレンツェ大学 | 人文社会科学研究科 | ｲﾀﾘｱ美術史 | | ○ | 2013 |

## ○ グローバル・スタディ・プログラム（GSP）実績

| 大学名 | 2011年度 | | 2012年度 | | 2013年度 | | 2014年度 | | 2015年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から |
| フィンランド・セイナヨキ応用科学大学（派遣） | 10 | 9 | | | 13 | 8 | | | 14 | 7 |
| ベトナム・ノンラム大学（派遣） | | | | | 11 | 11 | | | | |
| マレーシア・マラヤ大学（派遣） | | | | | 14 | 0 | | | | |
| ギリシャ・アリストテレス大学（派遣） | | | | | | | 13 | 14 | | |
| マレーシア・マルチメディア大学（派遣） | | | | | | | 13 | 14 | | |
| フィンランド・セイナヨキ応用科学大学（受入） | | | 15 | 14 | | | 12 | 15 | | |
| ギリシャ・アリストテレス大学（受入） | | | | | | | | | 13 | 15 |
| マレーシア・マルチメディア大学（受入） | | | | | | | | | 15 | 15 |
| 計 | 10 | 9 | 15 | 14 | 38 | 19 | 38 | 43 | 42 | 37 |

（大学名：千葉大学）（タイプ：Ａ－②）

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

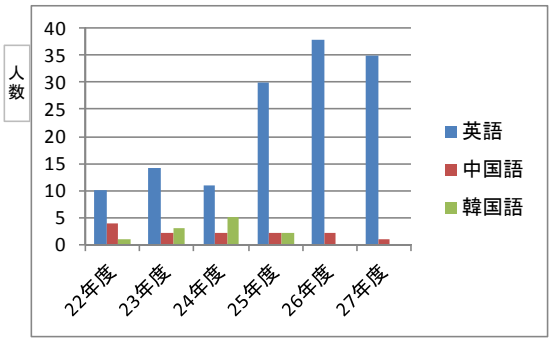
**④「様式6①取組の実績」で記入した実績を示すデータや資料等をとりまとめ、出典を付して記入又は貼付してください。【2ページ以内】**

## ○ 国際化に対応するFD実施状況一覧

| 年度 | FD種別 | テーマ | 参加人数 |
|---|---|---|---|
| H24 | 文学部FD | 留学生チューターへの研修 | 13名 |
| H24 | 融合科学研究科FD | 学生とのコミュニケーション：大学院の国際化の課題 | 41名 |
| H24 | 融合科学研究科FD | 情報科学専攻でのタイ・チョラロンコン大学での学生ワークショップの活動報告 | 8名 |
| H24 | 全学FD | スキップワイズプログラム国際FD | 12名 |
| H25 | 融合科学研究科FD | 情報科学専攻での国際学生ワークショップの活動報告 | 30名 |
| H25 | 教育学部FD | 「平成25年度教育学部・教育学研究科FD研修会」（ツインクルプログラム） | 103名 |
| H25 | 文学部FD | 留学生チューターへの研修 | 12名 |
| H25 | 普遍教育FD<br>全学FD | 「グローバルインターンシップ・ボランティアの現状と課題」 | 25名 |
| H25 | 工学部・工学研究科<br>融合科学研究科FD | 米国留学体験記 | 20名 |
| H25 | 全学FD | スキップワイズプログラム国際FD | 14名 |
| H26 | 文学部・法政経学部FD | 留学生チューターへの研修 | 12名 |
| H26 | 全学FD | スキップワイズプログラム国際FD | 18名 |
| H27 | 工学部・工学研究科<br>融合科学研究科FD | 米国の教育事情に関する研修 | 19名 |
| H27 | 理学部・理学研究科FD | 留学生の英語論文指導に関する研修 | 14名 |
| H27 | 全学FD | スキップワイズプログラム国際FD | 16名 |

## ○ 事務体制の国際化

語学研修受講者数




| | 22年度 | 23年度 | 24年度 | 25年度 | 26年度 | 27年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 英語 | 10 | 14 | 11 | 30 | 38 | 35 |
| 中国語 | 4 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 |
| 韓国語 | 1 | 3 | 5 | 2 | 0 | 0 |

海外派遣研修（短期）　受講者数□

| 年度 | 派遣先 | 人数 |
|---|---|---|
| 24 | イギリス | 5名 |
| | フィンランド | 5名 |
| 25 | イギリス | 4名 |
| | フィンランド | 3名 |
| 26 | 韓国 | 2名 |
| | タイ | 5名 |
| | 台湾 | 1名 |
| 27 | インドネシア | 1名 |
| | 韓国 | 1名 |
| | タイ | 2名 |
| | オーストラリア | 1名 |

※派遣期間は概ね10日間程度

海外派遣研修（長期）　受講者数

| 年度 | 派遣先 | 人数 |
|---|---|---|
| 22 | カナダ<br>アルバータ大学 | 1名 |
| | フィンランド<br>セイナヨキ応用科学大学 | 1名 |
| 23 | フィンランド<br>セイナヨキ応用科学大学 | 1名 |
| | インドネシア<br>インドネシア大学 | 1名 |
| | 中国<br>千葉大学中国オフィス | 1名 |
| 24 | インドネシア<br>インドネシア大学 | 1名 |
| | フィンランド<br>セイナヨキ応用科学大学 | 1名 |
| 25 | インドネシア<br>インドネシア大学 | 1名 |
| | フィンランド<br>ラップランド大学 | 1名 |
| 27 | インドネシア<br>インドネシア大学 | 1名 |
| | フィンランド<br>ラップランド大学 | 1名 |

※H26は実施せず
※派遣期間は概ね3カ月間程度

（大学名：千葉大学）（タイプ：Ａ－②）

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

**⑤他の公的資金との重複状況【2ページ以内】**

※当該申請大学等において、今回申請している内容以外に、文部科学省が行っている大学改革推進等補助金、国際化拠点整備事業費補助金、研究拠点形成費等補助金等又は独立行政法人日本学術振興会が行っている国際交流事業の補助金等による経費措置を受けている取組がある場合、また、現在申請を予定している取組（大学教育再生加速プログラム等）がある場合は、それらの事業名称及び取組内容について、1事業につき3～4行程度を目安に記入してください。その中で、今回の申請内容と類似しているものがある場合には、その相違点についても言及してください。

また、独立行政法人日本学生支援機構平成28年度海外留学支援制度（協定派遣・協定受入）に採択されたプログラムがある場合には、本事業の申請内容との関連について必ず明記してください。

【博士課程教育リーディングプログラム】
○「免疫システム調整治療学推進リーダー養成プログラム」（平成24～30年度）
難治性の免疫関連疾患（アレルギー、自己免疫疾患、癌、心血管疾患まど）に特化した「治療学」の推進リーダーを養成するプログラムを、医学と薬学が融合した大学院医学薬学府博士課程に組織し、領域横断教育と産学官連携によりグローバル社会で活躍する実践的なリーダーを育成する。
○「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」（平成24～30年度）
人間の安全保障を共通理念とし、それぞれ蓄積してきた資源を共有し、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、学際的・国際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する「災害看護グローバルリーダー」の育成に取り組む。

【スーパーグローバル大学等事業】
○「グローバル千葉大学の新生－Rising Chiba University－」（平成26～35年度）
グローバル人材に必要とされる「人間力」として、「俯瞰力」、「発見力」、そして「実践力」を取り上げ、それらの育成に特化した教育プログラムを新たに準備し、さらに、これらの人間力の育成を各学生にテーラーメードで行うために、SULA（Super University Learning Administrator）という新しい教育人材を配置する。このような人間力を身に付けたグローバル人材の育成に向けて、千葉大学を新生させる覚悟で改革を進める。
○「skipwiseプログラム」（平成24～28年度）
コミュニケーション英語や日本と外国に関する高度な教養知識を教授する「国際日本学」、海外留学など４つのアクションプランからなる、新たなプログラム「スキップワイズ・プログラム」を、全学で実施し、「知識準備(Knowledge Reserves)高流動(High Mobility型)のグローバル人材を育成する。

【大学の世界展開力強化事業】
○「ツイン型学生派遣プログラム（ツインクル）」（平成24～28年度）
教育学研究科と他研究科の学生がペアを組んでASEAN諸国に赴き、現地の小中高校で先生となって、日本語・日本文化や千葉大学が世界に誇る先端研究をテーマにした授業・実験を実施する、いわゆる「逆JETプログラム」を展開する。
○「ポスト・アーバン・リビング・イノベーション・プログラム（PULI）」（平成27～31年度）
日本の学生が中米（メキシコ、パナマ）の学生とともに世界の都市圏が抱える課題を考え、未来の快適な都市を創造するプログラムである。文系・理系の人材が協働し企業と同じプロセスでプログラムを実施することにより、未来のリビング・イノベーションに資する文理混合の実践型人材を育成する。また、事業の成果を産業化させるため大学発ベンチャー企業の設立を目指す。

【地（知）の拠点大学による地方創生事業】
○「クリエイティブ・コミュニティ創成拠点・千葉大学」（平成25～29年度）
地域課題が山積している大都市郊外の住宅地コミュニティを対象とし、そこにある大学として、自治体（千葉県、千葉市、松戸市、柏市、野田市）との強い連携の下、全学をあげて地域志向の教育・研究と社会貢献に向け様々な地域課題、社会問題に、総合的・包括的に取り組む拠点づくりを行う。
○「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の”しごと”づくり人材育成事業」（平成27～31年度）
千葉県のうち若者の人口流出している地域を千葉地方圏（事業協働地域）とし、千葉大学、参加大学、協力校、地方公共団体、地元企業、ＮＰＯ等とが事業協働機関として協働して、千葉地方圏の地域産業である農林水産、観光、メディカル連携等の分野において共同研究、技術移転により産業振興を図るとともに、そのイノベーションを進める人材育成を推進する。

【大学教育再生加速プログラム】
○「高大連携での科学教育コンソーシアムによる「次世代才能スキップアップ」グローバル理系人養成プログラム」（平成26～31年度）
これまで17年間にわたり取り組んできた「先進科学プログラム」を拡大するとともに、千葉県・千葉市教育委員会や県内のSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）と連携し、高校生段階から才能ある生徒を対象として、大学教養レベルの理系教育を実施する。

【大学間連携共同教育推進事業】
○「実践社会薬学の確立と発展に資する薬剤師養成プログラム」（平成24～28年度）
先端医療に貢献する千葉大学薬学部と地域医療に貢献する城西国際大学薬学部、災害医療に貢献する千葉科学大学薬学部がそれぞれの特徴を生かし、これまで組織的な取組みが行われて来なかった社会薬学に貢献する薬剤師を養成する連携教育を行う。

【先進的医療イノベーション人材養成事業（未来医療研究人材養成拠点形成事業）】
○「未来医療を担う治療学CHIBA人材養成」（平成25～29年度）
「治療学イノベーション」の視点で医学部から大学院までの一貫的教育システムを導入し、先見性と柔軟性、幅広い視点を有し、将来の医療イノベーションを担う人材を輩出することを目的とする。
○「超高齢社会に対応する総合診療医養成事業～地域と大学でロールモデルを継続的に育てる仕組みを作る～」（平成25～29年度）
超高齢化社会での様々な問題を解決できる総合診療医を、大学の医・薬・看が地域と一体となって養成する。

【先進的医療イノベーション人材養成事業（がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン）】
○「国際協力型がん臨床指導者養成拠点」（平成24～28年度）
グローバル化が急速に進むがん医療において、10～20年後の日本のがん医療の中心で活躍する国際感覚に富んだがん専門医療人、指導者を育成する。

【大学・大学院及び附属病院における人材養成機能強化事業（基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成）】
○「国際基準に対応した医学教育認証制度の確立」（平成24～28年度）
医学部では良質の医師を育成する責務がある。このためには医学教育の質を保証し、かつグローバル化が進んだ現在では国際基準で医学部、医学教育が認証されることが欠かせないため、国際基準に合致した日本版の認証評価基準を策定し、それに基づいて医学部の認証評価を行う体制を構築するための調査研究を目的とする。

【グローバル人材の育成に向けたＥＳＤの推進事業】
○人間力を育む千葉ESDの地域展開（平成27～平成29年度）
将来のグローバル社会において真に持続性のある発展を目指し、子どもたちが感性の豊かなサイエンスマインドを有し、環境を視野に入れながらグローカルに成長していくための人間力を育むESDの地域展開を拡大する。

平成28年度海外留学支援制度（協定派遣）に採択されたプログラムのうち、本事業の申請内容と関連性のあるものはない。